# ジェラシー　夢の虜

関根信一

【登場人物】

川島芳子　清国第十四王女　愛新覚羅顕子
川野万里江　元女形俳優
村西敏雄　上海通の作家
田山隆一　上海駐在武官
三田千鶴子　芳子の秘書
山本和人　田山の部下
梅原早苗　従軍記者
木島健太郎　無線技師
大槻品子　芳子と万里江の同僚のダンサー
林美矯（リンメイジャオ）　万里江の大家

主な舞台は、昭和七年（一九三二年）の上海。
共同租界の中央を南北に突っ切っている四川北路にある、川野万里江とマリーが住む洋館。
春の終わりから夏の始まりまでの約二ヶ月間。そして、九月のある一日。
重厚な、しかし、やや古びた印象の居間。
西洋と東洋が同時にあるような、いかにも上海といった雰囲気のつくり。
下手に玄関に続くドアが一つ。
上手には、それぞれの寝室に向かうドアが二つ。
舞台奥に、大きなフランス窓。レースのカーテンがかかっている。この窓の向うには、小さなバルコニーがある。
寝台のかわりにもなるソファと椅子が二脚、それに小さなテーブル。
窓の横に大きな箱型の蓄音機。レコードが何枚か入った棚もある。
開幕前、上海で当時流行ったチャールストンやタンゴが流れている。
この年の一月、上海事変が始まり、街は市街戦のただ中にあった。
そんなことをまるで感じさせない。いや、むしろ、戦争の後だからこその浮かれた気分が街にもこの部屋にも満ちている。

＊　＊　＊　＊　＊

## 一場

アルフレッド・ハウゼ楽団が演奏するタンゴ「ジェラシー」が聞こえてくる。
舞台が明るくなると、万里江と木島健太郎がタンゴを踊っている。
昭和七年（一九三二年）四月の午後。
上海、四川北路にある川野万里江のアパートの居間。
二人のタンゴは初めのうちはうまくいっているが、途中から健太郎のステップが怪しくなる。
万里江が無理矢理リードするが、健太郎は曲の途中で踊るのを止めてしまう。
健太郎、レコードを止める。

万里江　大丈夫よ、あなた才能ある。
健太郎　いいですよ、無理しないで。
万里江　無理じゃない。なんていうの、繊細さ。そう、細やかな気遣いっていうのかしら、感じたわ、踊りながら。
健太郎　自信がないだけです。
万里江　でも、伝わってきたわ、あなたの手、指先から、そんな思いが。きれいな指ね。ピアニストみたい。
健太郎　やめてください。僕は、ただの無線技師ですから。たしかに、手先は器用かもしれないけど。やっぱりダンスは無理でした。
万里江　そんなことないって。あなたの気持ち、すばらしいと思うの。踊ってみたい。そう思ったら、踊ってみるべきよ。私、お手伝いさせてもらうわよ。安くしとくから。
健太郎　やっぱり無理です。僕がダンスなんて。
万里江　うちの店でそれらしく踊ってる人たち、みんななんて上手に踊るんだろうと思うでしょ？　フランス人やイギリス人だけじゃなくて、日本人まで、いつあんな踊り覚えたんだろうって。みんな、生まれたときから踊ってたみたいに。でも、違うの。みんなね、こっそり練習してるのよ。
健太郎　そうなんですか？
万里江　そうよ。才能の問題じゃないの。これは努力よ。そして、努力して踊れるようになったら、知らん顔して、当たり前みたいに踊ってみせるの。努力したことなんかおくびにも出さずに。
健太郎　でも……
万里江　私に任せて。あなたをどこのダンスホールでも人の目を引く、最高のいい男にして

みせる。

健太郎　……わかりました。もう少し考えて、またお返事します。じゃあ、蓄音機の修理は終わったんで、今日はこれで。修理代は……

万里江　大家に言って、下にいるから。ちっちゃいおばあちゃん。この部屋、家具付きで借りてるんだもの、家具の修理代は大家持ちでしょ。

健太郎　それなんですけど、うちの社長からも言われてるんですが、中国人は金払いが悪いから、部屋の日本人からちゃんといただくようにと。

万里江　だいじょうぶよ。うちは。

健太郎　あの、僕、中国語できないんです。

万里江　上海にはいつから？

健太郎　四月に来たばかりなんです。

万里江　まあ、そう。でも、平気。しゃべれなくても、紙に書けば。ほら、漢字で書けば、すぐわかる。簡単でしょ。日本人はみんなそうしてるわ。平気よ。

健太郎　あの、今、お願いします。

万里江　……あなたにタンゴを教えてあげるっていうんじゃだめ？

健太郎　は？　蓄音機の修理代のかわりに？

万里江　そうそう。

健太郎　あの……

万里江　お金、ないの。

健太郎　またまた……

万里江　ほんとだって。

健太郎　だって、新世界のナンバーワンじゃないんですか？　店でもそう言ってたじゃないですか？

万里江　踊り子はみんなそう言うことになってるの。

健太郎　じゃあ、今日じゃなくても。

万里江　明日だって、お金ないと思うよ。

健太郎　じゃあ、なんでわざわざ呼んだんですか。

万里江　蓄音機が壊れたからでしょ。

健太郎　そうじゃなくて……

万里江　わかった、じゃあ、もう一度元に戻してくれる。それで、この話はなかったことにしましょう。蓄音機はまた壊れるけど、あなたは少しだけタンゴの基礎を身につけた。それでいいんじゃないかしら？

健太郎　そんなむちゃくちゃな。

万里江　さあ、元に戻して。

間

健太郎　わかりました……。じゃあ、いいです。
万里江　ありがとう。

**健太郎、荷物をまとめて帰ろうとする。**

万里江　お茶でも飲んでかない？
健太郎　結構です。仕事の途中なんで。
万里江　じゃあ、また夜ね。今日も来るでしょ？
健太郎　さあ……
万里江　せっかく練習したんだもの、みんなの前で踊ってみなきゃ。
健太郎　自信ないです。
万里江　じゃあ、もう少し練習する？
健太郎　……。
万里江　ただでいいから。ほんとよ。
健太郎　ありがとうございます。じゃあ、また。

**健太郎、出て行こうとすると、大槻品子がやってくる。**

品子　こんちわ。あら、健ちゃん、どうしたの？
万里江　品ちゃん、遅かったじゃない。
品子　そんなことより、なんでマリーさんのところに健ちゃんがいるの？
健太郎　蓄音機を直しに来たんだよ。
品子　健ちゃん、無線技師じゃないの？
健太郎　うちの店、なんでもやってるから。でも、こんなところで会うなんて。
万里江　悪かったわね、こんなところで。
品子　そうなんだ、私、おじゃましたかしらと思った。
健太郎　そんなんじゃないって。
万里江　かまわないわよ、もう帰るところだから。
健太郎　品ちゃんこそ、何？
品子　ちょっとね。

**と、新しいバッグを見せる。**

万里江　やだ、かわいいバッグ。

**バッグを手に取る万里江。**

品子　いいでしょ？　思いきって買っちゃった。ねえねえ、今、南京路ぶらぶら歩いてたんだけど、すごいねえ、上海は。東京じゃ見かけないようなドレスがいっぱいあるんだもの。

万里江　何言ってるの、昨日や今日来たわけじゃないでしょうに。

品子　だって、この一月に戦争があったばかりでしょ？　うちの店からも銃撃戦の音が聞こえてた。なのに、街を歩いてると、そんなのうそだったみたい。

健太郎　大陸の人間はたくましいから。

品子　（バッグを取り戻して）で、どの部屋なの？

万里江　ここが居間。寝室が二つ。だから、どっちでも好きな方使って。

品子　どっちでもいいの？

万里江　うん、かまわない。

品子　思い出とかないの？

万里江　ないない。どうせだから、きれいさっぱり。

品子　じゃあ、引っ越せばいいのに。

万里江　上海事変からこっち、日本人に部屋を貸す大家が少なくなったのよ。足下見てふっかけてくるからね。ここ格安なんだもん、便利もいいし。引っ越したくないの。

品子　たしかにね。どっちでもいいの？

万里江　うん。

品子　じゃあ、こっちにしようかな？

**片一方のドアの方に歩き出す。**

万里江　わかった、ちょっと待ってて。片付けるから。

品子　何、マリーさんの部屋なの？　じゃあ、こっちでいいよ。

**もう一つの部屋の方に向かう。**

万里江　ちょっと待ってて。

品子　何？　こっちもなの？　今日来てって言うから来たのに。出直そうか？

万里江　平気、ちょっとだけだから。

**万里江、部屋に消える。**

健太郎　ここに引っ越し？

品子　そう。新世界の寮、出たいんだ。マリーさんも、男に逃げられちゃって。部屋が空いたからって。

健太郎　逃げられた？

品子　そうそう。あの人、ほんとに次から次だから。いつも、今度こそはって言ってるんだけどね、マリーの「今度こそ」と中国人の約束はあてにならないって。

健太郎　あの人と仲いいんだ？

品子　まあね、私の方が店じゃ古いんだけど……

健太郎　そうなの？

品子　そう。でも、頼りがいがあるんだよね。マリーさん、今年の一月に店に来たの。それまでは北京にいたんだって。ダンスうまいし、中国語うまいし、何だか先輩みたいになっちゃって。

健太郎　へえ……

品子　私、こっちに知り合い全然いないから。何かいいことあるかと思って、上海に来てみたのはいいけど、困っちゃって。怖いところなの上海って。街の女っていうの、春を売ってる女たちが当たり前に町中にいるし、アヘン崖はあちこちにあるし。

健太郎　こわい話よく聞くよね。夫婦が別々の車に乗ったら、片一方の車がどこかに行っちゃって、奥さん行方不明とか。

品子　そうそう。こわいよね。

健太郎　うん。

品子　健ちゃん、ダンス習った？

健太郎　え、うん。

品子　やだ、やっぱり。

健太郎　何、やっぱりって？

品子　やだ、マリーさん、健ちゃんに気があるのかも……、いつもそうなの、先週出て行ったっていう男だってねえ、はじめは……やだ、どうしよう。

万里江　（登場して）違うわよ！　品ちゃん、片付いたから、どうぞ。

品子　はーい。

万里江　余計なこと言わないの。

品子　はーい。

万里江　（健太郎に）あんたも、もう帰っていいんじゃない？

健太郎　あ、はい。おじゃましました。じゃ、品ちゃん。

万里江　じゃ。

**二人、部屋に消える。**

**健太郎、なんとなく立ち去りがたい。**

そして、なんとなくレコードをかけると、なんとなくさっきのタンゴを踊ってみる。イスを抱え上げて踊る。
と、ドアが開いて、村西敏雄が入ってくる。
踊っている健太郎、村西がレコードを止める。と、あわてて踊りをやめる。

健太郎　あの……
村西　誰？
健太郎　僕は、電気屋です。
村西　タンゴを？
健太郎　習ったばかりなんで。
村西　電気屋が？
健太郎　あの、話すと長いんですけど、修理代のかわりに。
村西　マリー？
健太郎　ああ、そうです。
村西　そうか、そうなのか。なるほど。
健太郎　あの、何がなるほどなんですか？
村西　マリーは？
健太郎　奥の部屋に。あの、マリーさん！　すみませんが、どなたでしょう？
村西　作家だよ。
健太郎　は？

マリーと品子、戻ってくる。

万里江　あら、村西さん、どうしたの？
村西　ちょっと頼みがあるんだ。
万里江　なーに、改まって。
健太郎　（品子に）誰？
品子　作家の村西敏雄先生。知らないの？
健太郎　ああ、村西敏雄ね……。
村西　部屋が空いたって聞いたんだけど。僕にしばらく貸してもらえないだろうか？
万里江　村西さんに？
村西　ああ。
品子　村西さんは、今、立派なお部屋があるんじゃないんですか？　キャシーのところで暮らしてるんじゃないんですか？
万里江　そうよ。あんな立派なお屋敷があるのに、どうして？
品子　それに、私が引っ越してくることになってるんですからね。

村西　何、そうなの？
品子　今、決まったところなんです。
村西　そうなんだ。困ったなあ。
万里江　品ちゃん、ちょっと待って。村西さんの話、聞いてみようじゃないの。
品子　マリーさん。また、妙なこと考えてるんじゃ？
万里江　いいから。何があったの？　キャシーね？
村西　そう、キャシー。いや、川島芳子のせいなんだよ。
健太郎　川島芳子？
マリー　店で会ったことなかったっけ？　愛新覚羅顕子、清朝の第十四王女、日本で育てられた「東洋のマタ・ハリ」。
品子　でもって、うちの店のナンバーワンのダンサー、キャシー。
マリー　ダンサーとして、中国の国民政府の要人に近づき、機密情報を聞き出す女スパイ。
健太郎　そんな人があの店に？　ほんとうに？
村西　君はいちいち、うるさいな。
健太郎　すみません。
万里江　何があったの？
村西　川島芳子の半生を小説にしてほしいって、上海駐在公使館付武官の田山少佐に頼まれてるのは知ってるよね？
万里江　ええ。それで、村西さんはキャシーと一緒に暮らしてるんでしょ？
村西　田山少佐と川島芳子がどういう関係かは？
万里江　え、どういうって。
品子　愛人関係。
万里江　品ちゃん、とっても親しい間柄って言うの。
村西　そう、とっても親しい。親しすぎる。普通じゃない。どうかしてる。「芳子の屋敷に寝泊まりしたらどうだ」と言い出したのは田山少佐なんだ。芳子も、ああ、それがいい、僕はちっともかまわないって。
万里江　田山少佐が？

**万里江と品子、顔を見合わせる。**

村西　先週の木曜日、荷物を持って、ホテルから芳子の屋敷に移った。静安寺路に面した広大な屋敷だ。一番大きな客用の寝室をあてがわれた。僕付きの下僕も二人いる。聞き書きをするのは、毎日午後一時から五時まで、一階の客間でということになった。
万里江　聞いたわ、キャシーはそのあと、ドレスに着替えて、店にやってくるんですもの。
村西　それが、その日の夜だ。明け方近くだったと思う。僕は、昼間の聞き書きを書き起

こしているところだった。そこへ芳子がやってきたんだ。店から帰ってきたばかりで少し酔ってるようだった。「どうしたんだ」と聞くと「今夜からこの部屋で寝る」と言うんだ。

品子・健太郎　え？

万里江　どうして？

村西　田山少佐にそうするよう言われたんだそうだ。「僕は別にどうでもいいんだけど、あいつがその方がいいっていうからそうしようと思う」って。「それは困る」って言ったんだが、さっさととなりのベッドにもぐりこんでしまって。

万里江　やるわね、キャシー。

品子　マリーさん！

村西　しょうがないから、そのままにしていたら、むくっと起き上がって、こう言うんだ。「僕は、十六の歳に突然部屋に入ってきた義理の父に貞操を奪われたんですよ。そう、こんな夜でした。そのお話も今度しましょうね。お休みなさい」

健太郎　おお……。

村西　……。

健太郎　すみません。

万里江　その話はもうすんだの？

村西　生まれたときから始まって、今夜がどうやらそのあたりになりそうなんだ。

品子　やだ、こわいわね。

万里江　村西さんらしくもない、大正の頃から上海に来て、日本人の中では誰よりも上海にくわしい百戦錬磨のあなたが、そんなことでどぎまぎするなんて。

村西　するだろう、考えてもみろ、芳子のうしろには田山少佐が、日本軍がついてるんだ。これは、罠だ。芳子もそれを知った上で、おもしろがっている。

万里江　それで逃げ出してきたわけね。

村西　ああ、情けないがしかたない。芳子の家にはここから通うことにする。

品子　ホテルに帰ればいいじゃないですか？

村西　それも考えたんだが、芳子が転がりこんでくるに違いないと思って。

品子　そうか。

万里江　やりかねないわね。

**とドアをノックする音。**

**一同、緊張する。**

**ドアが開いて、この家の大家、林美嬌（リンメイジャオ）が登場。小柄な老婆。**

林　（中国語で万里江に）今月分の家賃をもらいに来たよ。＊我来收这个月的房租。（ウォ[3]ライショー[1]ジェ[4]ゲ[4]ウェ[4]デ[4]ファン[2]ジュ[1]。）

万里江　（中国語で）ああ、ちょっと待ってて。あとで下に持って行くから。＊啊啊！等一下！我待会儿拿下去给你。（アア$^{4}$！デン$^{3}$イ$^{0}$シャ$^{4}$！ウォ$^{3}$ダイ$^{1}$ホイ$^{4}$ナー$^{2}$シャ$^{4}$チ$^{4}$ゲイ$^{2}$二ー$^{3}$。）

林　（中国語で）あんたのあとではあてにならない。今もらっておくよ。＊你的待会儿是靠不住的。我现在就要。（二ー$^{3}$デ$^{4}$ダイ$^{1}$ホイ$^{4}$シ$^{4}$カオ$^{4}$ブ$^{4}$ジュ$^{4}$デ$^{4}$。ウォ$^{3}$シエン$^{4}$ザイ$^{4}$ジューヤオ$^{4}$。）

品子　誰？

万里江　大家よ。家賃の催促。あとで持って行くって言ってるんだけど。

品子　今払えばいいじゃない。

万里江　お金ないもん。

村西　じゃあ、僕が。（中国語で林に）僕が払うよ。いくらだい？＊那…让我来吧。　我来付。请问多少钱？（ウォ$^{3}$ライ$^{2}$フ$^{4}$。チン$^{3}$ウェン$^{4}$ドア$^{1}$シャオ$^{3}$チェン$^{2}$？）

林　（中国語で）今月と先月で二〇〇元だよ。＊这个月和上个月加起来总共是两百元。（ジェ$^{4}$ゲ$^{4}$ウェ$^{4}$ホー$^{2}$シャ$^{4}$ゲ$^{4}$ウェ$^{4}$ジャー$^{1}$チー$^{3}$ライ$^{2}$ジョン$^{3}$ゴン$^{4}$シ$^{4}$リャン$^{2}$バイ$^{3}$ウェン$^{2}$。）

村西　（万里江に）二〇〇元だって言ってるけど。

万里江　ふた月分だからそう。

村西　（中国語で）じゃあ。＊好，给你。（ハオ$^{3}$、ゲイ$^{2}$二ー$^{3}$。）

**と、札入れから金を出し、林に渡す。**

林　（札を数えて）たしかに。（万里江に）今度の男はいいね。男前だし気前がいいね。まあ、うまくやるんだね。＊没错。这次的男人不错嘛。又俊又阔气。哎哟，你可得好好捉住哟。（メイ$^{2}$ツォ$^{4}$。ジェ$^{4}$ツ$^{4}$デ$^{4}$ナン$^{2}$レン$^{2}$ブ$^{4}$ツォ$^{4}$マ$^{3}$。ユ$^{4}$ジュン$^{4}$ユ$^{4}$クオ$^{4}$チ$^{4}$。アイ$^{4}$ヨ$^{1}$、二ー$^{3}$コ$^{2}$デイ$^{3}$ハオ$^{3}$ハオ$^{1}$ジュア$^{1}$ジュ$^{4}$ヨ$^{1}$。

万里江　（中国語で）やめてちょうだい。そんな言い方。＊你别这么说话。（二ー$^{3}$ビェー$^{2}$ジェ$^{4}$マ$^{4}$シュオ$^{1}$ホア$^{4}$。）

品子　なんだって？

万里江　村西さんのこと、男前で気前がいいって、うまくやれって。

品子　やだ。

**林、出て行く。**

万里江　ありがとう。でも、ほんとうにいいの？

村西　ああ。じゃあ、よろしく頼むよ。

万里江　わかったわ。私が、キャシーから村西さんをお守りすればいいのね。

村西　ああ、二ヶ月だけだから。小説は、こっちで聞き書きをして、この秋から「婦人公

論」で連載の予定なんだ。

万里江　わかったわ。品ちゃん、じゃあ、二ヶ月待って。まずは、この人を助けてあげましょう。

品子　そうなの、村西さん、約束ですからね。

村西　ああ。

**とノックの音。**

万里江　（中国語で）どうぞ。＊进来。（ジン[4]ライ[2]。）

**入ってくるのは、地味な和服の若い女。**

女　おじゃまいたします。川野万里江さんのお部屋はこちらでしょうか？

万里江　ええ、そうですけど。

女　よかった。

村西　君は……

女　村西先生、こんにちは。やはりこちらだったんですね。芳子さまの思ったとおりでしたわね。

万里江　誰？

女　申し遅れました。私、芳子さんの秘書をしております、三田千鶴子と申します。

村西　なぜここに？

千鶴子　先回りをしようと思ったんですのに。村西先生はきっと万里江さんのところに助けを求められるに違いない。だから、僕たちも行ってみようじゃないかって、芳子さんが。

村西　なんだって。

万里江　ちょっと待って、どういうことなの？

声　簡単なことじゃないか。僕が引っ越してくるんだよ。

**ドアが開いて、川島芳子が登場する。**
**男装の麗人のイメージからは遠い、女装の姿。**
**ただし、一人称は「僕」。**

万里江　キャシー！

芳子　村西さん、逃げたってだめだよ。あんたは、僕と一緒に暮らしながら、僕の半生記を書くんだ。そういう約束じゃないか。

万里江　待って、キャシー、ねえ、うちはもういっぱいなの、村西さんが、越してくることになったから。

芳子　ああ、そう、じゃあ、二人一緒に世話になることになるね。千鶴子、車から僕の荷物を持ってきて。

千鶴子　はい、芳子さま。

**千鶴子、退場。**

万里江　二人一緒って。それは無理。

村西　芳子くん、悪いが、帰ってくれないか。仕事のことを忘れたわけじゃないじゃないか。君の屋敷へは、僕がここから通うことにするから。

芳子　そんなんで立派な半生記なんて書けるわけない。僕はあなたに僕のすべてを知ってほしいんだ。

村西　……芳子くん。悪いが、僕はもうこの部屋の家賃を払ってしまったんだ。

芳子　マリー、この部屋の家賃ずいぶんたまってるそうだね。今、これからのふた月分と一緒にきれいに払っておいてあげたよ。

万里江　ずいぶんって、一つだけよ。ていうか、キャシー、あんただまされてる。二重取りよ。

芳子　ええ？

**千鶴子と林、荷物を持って、登場。**

万里江　（中国語で）ちょっと、あんた、家賃二重取りしたってほんと？　＊喂！听说你收了两次的房租，真的吗？（ウェ$^{4}$！ティン$^{1}$シュオ$^{1}$ニー$^{3}$ショー$^{1}$レ$^{4}$リャン$^{3}$ツ$^{4}$デ$^{4}$ファン$^{2}$ジュ$^{1}$、ジェン$^{1}$デ$^{4}$マ$^{1}$？）

林　（中国語で）何のことだい。知らないね。＊你说什么，我不知道。（ニー$^{3}$シュオ$^{1}$シェン$^{3}$モ$^{4}$、ウォ$^{3}$ブ$^{4}$ジー$^{1}$ダオ$^{4}$。）

万里江　（日本語で）何よ、とぼけちゃって。村西さんからも言ってやって、さっき払っただろうって。

村西　（中国語で）さっき払ったよね、この部屋の家賃。＊我刚才不是给了你房租吗？（ウォ$^{3}$ガン$^{1}$ツァイ$^{2}$ブ$^{4}$シ$^{4}$ゲイ$^{3}$レ$^{4}$ニー$^{3}$ファン$^{2}$ジュ$^{1}$マ$^{1}$？）

林　（中国語で）知らないね、あんたは誰だい？＊不知道，你是谁呀？（ブ$^{4}$ジー$^{1}$ダオ$^{4}$、ニー$^{3}$シ$^{4}$シェイ$^{2}$ヤ$^{4}$？）

村西　（中国語で）おい、うそをつくな！＊喂！你别欺骗人！（ウェ$^{4}$！ニー$^{3}$ビェー$^{2}$チー$^{1}$ピェン$^{4}$レン$^{2}$！）

林　（中国語で）おお、怖い怖い。＊哎哟！吓死我，吓死我了！（アイ$^{4}$ヨ$^{1}$！シャ$^{4}$シ$^{2}$ウォ$^{3}$、シャ$^{4}$シ$^{2}$ウォ$^{3}$レ$^{4}$！）

**林、部屋を出て行く。**

品子　どうしたの？
万里江　あんたのことなんか知らないって。
品子　こわいわね。
芳子　それじゃ、マリー、今日からこの部屋は僕のものだ。何か文句があるかい？

**間**

万里江　いいわ。キャシー。引っ越していらっしゃい。二ヶ月だけね。
芳子　さすがはマリー、話がわかる。
村西　マリー……。
万里江　いいから。私に任せて。
芳子　よし、（健太郎に）じゃあ、君、荷物を上げるのを手伝ってくれ。
健太郎　（うれしい）はい。あの、川島芳子さん？
芳子　そうだよ。
健太郎　本物の？
芳子　ニセモノもいろいろ出回ってるらしいがね、僕はホンモノだ、多分。
健太郎　今日は男装じゃないんですか？
芳子　男装の僕はすっかり有名になってしまったからね。今日は女装の気分なんだ。じゃあ。
健太郎　はい。
品子　あ、健ちゃん。

**林と千鶴子に健太郎、出て行く。品子も後を追う。**

芳子　寝室は二つか。村西さん、どっちにします？

**楽しそうな芳子、顔を見合わせる万里江と村西。**

＊　＊　＊　＊　＊

## 二場

**翌日の昼過ぎ。**
**上海駐在武官、田山隆一が一人いる。いらいらと落ち着かない様子。**
**ドアを開けて、田山の部下、山本和人がやってくる。**

二人とも軍服。

田山　なんだって？
山本　少佐、ばあさんが言うには、マリーと男が、一時間ほど前に出て行ったそうです。そして、新しくやってきた気前のいい女は、まだ姿を見ていないと。
田山　そうか。
山本　いやあ、苦労しました。話そうとしないんですから。筆談にも応じようとしない。金を渡して、ようやく聞き出しました。
田山　ああ、金だ。全部それで済ませろ。中国語なんて必要ないぞ。なんなら、金を払って、あいつらに日本語を覚えさせてやったっていいんだ。そのうち、この街も全部日本になるんだ。
山本　日本租界だけの話ではないのですか？
田山　ああ、上海中、中国中だ。おれたちはそのためにいるんだろ。しっかりしろ。
山本　はい。で……
田山　（部屋を指して）寝ている。今、見てきた。まったく、何時だと思ってるんだ。
山本　お屋敷でも、朝はいつも遅かったと思いますが。起こさなかったんですか？
田山　起こそうとした。びっくりさせてやろうと思った。そしたらどうだ。あいつ、ぼんやり目を開けてこう言うじゃないか。「ああ、村西さん、もう起きたんだね。僕はもう少し寝かせてもらうよ。なんだか体がだるいんだ。うふふ……」
山本　村西さんって……ええ？
田山　うふふだぞ。（寝椅子に倒れ、身悶える）ああ、どうしてくれよう。
山本　少佐。こうなることは初めから、予想していられたのではないですか？
田山　なんだと？
山本　失礼ですが、村西に、芳子と一緒に住めばいいと言ったのは、少佐ではありませんか？
田山　呼び捨てにするな。
山本　村西さんに。
田山　違う。芳子さんと言え、芳子さんと。
山本　はあ……芳子さんと。
田山　そうだ。それでいい。
山本　失礼ですが、今さら何を言ってらっしゃるのか、わかりません。私には、もうあの女とは手を切ったと宣言されたではありませんか。
田山　ああ、手を切った。いや、わかってる。俺は、もうこれ以上、あいつに振り回されたくないと思った。だから、あいつを満州帝国の女官長にしてやったんだ。それがどうだ、あいつはその役目が気に入らないと仕事を放り出して、日本に帰った。かと思うと、また上海に姿を現す。俺の上海にだ。女装男装、やりたい放題だ。

山本　ダンサーとして、国民政府の情報を探れと命じたのは少佐ではないのですか？
田山　ああ、そうだ。だが、これは仕事上のつきあいだからな。
山本　だったら、何をいらいらしていられるのですか？
田山　知るか！　お前は、内地に女はいるのか？
山本　いえ。
田山　こっちには？
山本　いいえ、いません。
田山　惚れた女も？
山本　はい。
田山　そうか、じゃあ、話してもわからんだろうな。自分でもどうにもならないこのもやもや。
山本　はい。残念であります。

**万里江と村西がやってくる。**

万里江　あら、田山少佐。
田山　（不機嫌に）やあ。
村西　どうも。
万里江　まあ、どうして？　山本さんも。
山本　お邪魔しています。
田山　ばあさんに言って、通してもらったよ。
万里江　ああ、やっぱり。
村西　何か用ですか？
田山　村西くん、その言いぐさはないだろう。なんで、急に引っ越したんだ。書蓮が一人きりでいたぞ。芳子はどこだと聞いたら、四川北路のマリーの部屋だというじゃないか。
村西　今日、お知らせにうかがおうと思っていました。
田山　まさか、逃げ出そうなんて考えたわけじゃないだろうね。
村西　まさか。僕は仕事をしてるんですよ。そんな途中で放り出すなんて……
田山　（怒鳴る）じゃあ、芳子を一人にしてどこに行ってたんだ！
村西　食事ですよ
田山　へ？
万里江　ええ、昼はいつも外ですませてるんです。
田山　そうか。食事か？　ほんとうにそうか？
山本　嘘をつく理由はないと思いますが。

田山　（咳払い）どうだね、すすみ具合は？
村西　それが、なかなか、話が進まなくて、見てきた映画の話をしたり、こっちで見た曲芸の見せ物の話になったり、かと思うとダンスを踊ろうと言い出したり。
田山　ダンス？
村西　あの人は気まぐれなんです、そして嘘つきですね。あの、大きな声なじゃ言えないんですが、養父に犯されたと言いましたよ。ご存じですか？
田山　ああ、あれの実の父親は、養父の川島浪速に芳子を渡すとき、「君におもちゃを送る」と言ったそうだ。そのまんま、おもちゃにされたというわけだ。
万里江　ひどい話ね。
田山　何、どこまで本当かわからん。
万里江　嘘だっていうんですか？
田山　どっちだってかまわん。あいつの言うことなどあてにならんよ。
村西　それでも、聞き書きをしろというんですか？　どうせ口から出任せのうそなら、なんでわざわざ聞く必要があるんですか？　僕はあなたから話を聞いて、それをうまくまとめてみせますよ。その方がずっと簡単じゃないですか？
田山　あいつは、俺にも本当のことを話していないかもしれない。いや、嘘か本当かなんてどうでもいい、あいつのことをこれ以上考えたくないんだ。だから、君に頼んだんだよ。仕事としてね。
村西　……ありがとうございます。
田山　で、どうだね、すすみぐあいは？
村西　さあ、よくわかりません。あの人は順を追って話すということをしないんですから、昨夜は、蒙古の王カンジュルジャップとの結婚式の話を。
田山　ああ、五年前の話だ。
村西　それが、兄嫁にあたるという人がどれだけ自分にいじわるだったかということばかりを話すんですよ。これじゃ、三文小説だ。僕はいい嫁になろうとしたんだけど、口うるさい姑と小姑がいてねと。そんな話を延々聞かされたって、戦意高揚の半生記なんてできっこありません。
田山　まあ、くさるな。婦人公論の読者たる御婦人連は、その手の話が好きかもしれんからな。
村西　もう、うんざりですよ。ですから、聞き書きなんてたいしたもんじゃありません。ただのおしゃべり雑談の記録です。
田山　何、おしゃべり。そうか、それは楽しそうだ。あいつは、なかなか気のいい女なんだよ。そうは思わないかね？
村西　そうかもしれませんね。
田山　ふん、そうか。あ、それで、あいつとはもう寝たのかな？
村西　……！？
田山　芳子とだよ。一緒に寝ているんだろ？

村西　いいえ。
田山　隠さなくてもいい。こうなることは、あらかじめ予想していたんだからな。
村西　寝てませんよ。
田山　またまた。
村西　ほんとうです。
田山　（いきりたって）嘘をつくな！
村西　ほんとうです。
田山　引っ越したっていうから、なにごとかと思ったら、相変わらず同衾しているそうじゃないか。
万里江　同衾？
山本　一緒に寝ることです。
万里江　ああ。それなら、違います。お二人は一緒には寝てません。
田山　なんだと？ だって、芳子は向こうの部屋に。貴様はどこで寝てるんだ。
村西　ここですよ。
田山　え？
村西　この寝椅子で寝てるんですよ。
田山　なんだって？
万里江　ずいぶん考えたんですけど、それが一番いいんじゃないかって。ここなら、いつ誰が来るかわからないし、いくらキャシーだって、事におよぶわけにはいかない。
田山　あいつがそんなこと気にするもんか。
山本　そうです。僕が田山少佐のおたくにうかがったとき、あの人は、平気な顔して、少佐のベッドに寝ていました。全裸だったと思います。
万里江　全裸？
田山　しかし、あいつは今、君と一緒に寝てると……
村西　言ったんですか？
田山　いや、言ってはいないが、そんなふうだったんだよ！
村西　それは嘘です。
田山　まだ言うのか、俺がここまで譲歩してるのに。
千鶴子　失礼いたします。

**と言いながら、千鶴子と健太郎がやってくる。**
**手に大きな荷物。**

万里江　あら、千鶴子さん。
千鶴子　芳子さまは？
万里江　まだお休みよ。

千鶴子　よかった、間に合って。それでは、木島さん、お願いいたします。
健太郎　はい。

**健太郎、蓄音機にレコードをかける。流れ出す、ベートーヴェンの「月光」。**

万里江　何、これ？
千鶴子　ムーンライトソナタです。芳子さまは、朝一番にこれをお聞きになると目覚めがいいと言われて。少佐、レコードを持ってくるのを忘れてしまったので、今日お持ちしたんです。
田山　きみは誰だ。
健太郎　電気屋です。
田山　なぜここに？
健太郎　タンゴを習ってるんです。マリーさんに。そうですよね？
万里江　ええ。
田山　ここに泊まってるわけじゃ……
万里江　通いよ、通い。
田山　ああ、そう。
万里江　ねえ、こんな曲でよく目が覚めるわね。これ、ベートーベンの「月光」でしょ？なんで目覚めに「月光」なの？
千鶴子　さあ、芳子さまは、人と反対のことをするのがお好きだからじゃないでしょうか。このあと、ジャズに変えた頃、お出ましになるんですよ。
健太郎　ベートーベンにジャズっていうのも、妙な取り合わせですね。
村西　あの人らしいじゃないか。
万里江　そうね、そうかも。ねえ、それじゃ、これから毎日、これを聞くの、私たち？
村西　そういうことになるな。
千鶴子　私が、毎日、通ってまいりますので。
万里江　まあ、大変だこと。
千鶴子　いいえ、仕事ですから。
健太郎　僕がやってあげようか？　どうせ毎日、顔出してるし。一応、プロだから。
万里江　あなた毎日来るの？
健太郎　いけませんか？
千鶴子　お気遣いありがとうございます。私は、芳子さんの秘書でございますから、このくらいのことは当然ですわ。どうぞお気遣いなく。

**と「月光」の針が飛び始める。**

千鶴子　あら、どうしたんでしょう？　昨日までは何ともなかったのに。
健太郎　傷がついたのかな？
千鶴子　ジャズに切り替えます。
健太郎　ああ、僕がやりますよ。

**健太郎と千鶴子、奪い合うようにして、持ってきたジャズのレコードをかける。**
**流れ出す、軽快な曲。**

万里江　ようやく朝が来たってかんじね。
村西　もう二時過ぎだ。

**と、レコードが止まってしまう。**

健太郎　あれ、おかしいな？（ゼンマイをいじってみるが）あれ？
万里江　直してくれたんじゃないの？
健太郎　いや、直ったはずなんだけど……
千鶴子　どうしたんでしょう？

**とドアが開いて、芳子が登場。しどけないシルクのパジャマ姿。**

芳子　おはよう。どうしたんだい、みんなおそろいで。
田山　おはよう、芳子さん。新しい部屋ではぐっすり眠れたかな？
芳子　（田山に）なんであんたがここにいるんだ？
田山　そんな言い方はないだろう？　急にいなくなって心配したんだぞ。
芳子　しょうがないじゃないか、村西さんがあの屋敷じゃいやだって言うんだから。（村西に）ねえ？
田山　一言の連絡もなしとはどういうことだ。少しは自分の立場を考えてもらわないと。
芳子　（こともなげに）わかってる。
田山　芳子さん。
芳子　わかってるって言ってるだろう。貴様のそういうところが、僕は気に入らないんだ。つまらないことをいつまでもねちねちねちねち。
田山　つまらないこととはなんだ？
芳子　僕が逃げたとでも思ったのか？　村西さんと手に手を取って。
田山　（笑って）まさか……。

芳子　なんだ、あんたの心配ってのもそんなところか。永いつきあいなんだ。もっと気に懸けてくれていると思っていたよ。

田山　（困って）思っているよ。思っているだろう。だから、こうしてここに、なあ、山本。

山本　ええ、そのとおりです。

千鶴子　芳子さま、お召し替えを。

芳子　ああ、頼もうか。村西さん、昨日の続きは、朝飯を食ってからだ。

**芳子、千鶴子と一緒に部屋に向かう。**
**田山も後を追う。**
**ドア前での二人のやりとり。**

芳子　なんだ？

田山　どんな部屋で寝てるのか、少し見せてもらおうか？

芳子　なんだって？

田山　（小声で）芳子、いいじゃないか。（声を出して）俺にも責任があるからな。

芳子　責任か。なるほど、じゃあ、来ればいい。

**二人部屋に消える。**

万里江　責任って……

山本　芳子さんの生活の面倒は、全部、田山少佐が見ているんです。

健太郎　へえ、そうなんだ。

万里江　いつものことだけれど、田山少佐もほんとうに形無しね、キャシーにかかると。

村西　惚れた弱みってやつだろ。

健太郎　ああは、なりたくないですね。

村西　まったくだ。

山本　ちょっと外で待っています。

**山本、部屋を出て行く。**
**健太郎、村西、万里江**

万里江　いつまでいるつもりかしら、田山少佐。

村西　まったく、芳子ひとりでもめんどくさいのに、少佐まで。

万里江　毎日来る気かしら？

村西　勘弁してくれよ。

万里江　わかった、私がちゃんと言うわ。いくらなんでも、人多すぎ。
健太郎　そうですよ。ここはマリーさんの部屋なんだから。
万里江　ありがとう、健ちゃん。
健太郎　僕にダンス教える時間がなくなっちゃいますよね？
万里江　そうね、たしかに。
健太郎　でも、僕、毎日、顔だしますから。このぐらいの時間でいいですよね？
万里江　毎日？
健太郎　ええ、少しでも早く上達したいんです、ダンス。
村西　午後は、困るな。芳子の話を聞かないと。
健太郎　じゃあ、その間、マリーさんの部屋で待っててもいいです。あ、台所で千鶴子さんと一緒に食事の支度のお手伝いもしますよ。
万里江　あんた、仕事はいいの？
健太郎　いいんです。どうせ外回りの修理ばかりなんで。午前中にすませてしまえば、あとは一日、ぶらぶらして時間つぶしてるんで。
村西　川島芳子に興味があるんだろ？
健太郎　別にそんな……
村西　ごまかさなくていい。野次馬根性ってやつだろ。たしかに、おもしろそうだもんな。自分が関係なければ、こんなにおもしろい二人もいないんだが。
万里江　ねえ、あの二人のことも小説に書くの？
村西　さあ、どうなるかわからない。まあ、川島芳子のことを書くなら、あいつのことを書かないわけにはいかないんだけどね（ため息）。
健太郎　大変ですね。
万里江　健ちゃん、おもしろがるのもほどほどにね。
健太郎　（村西に）邪魔はしません。すみっこにいるだけですから。
村西　芳子がいいって言ったらね。

**芳子と田山が登場。芳子、中国服に着替えている。**
**後から出てきた千鶴子、シーツや着替えを持って、下手のドアへ。**

健太郎　おお。
芳子　どうだい？
万里江　さすがは、清朝の王女ね。中国服がとてもお似合い。
健太郎　すばらしいです。僕は、男装より、その格好の方が好きです。
田山　南京路のマダム・ワンの店で特別に作らせたんだ。芳子にねだられてね。
芳子　村西さんは、中国服がお好きなんでしょう？
田山　何？

芳子　どうです？　似合いますか？
村西　ああ、いいんじゃないかな。だが、僕は別に中国服が好きなわけじゃない。
芳子　そうだ、村西さんが、好きなのは中身でしたね。ぴちぴちの中国娘。失礼しました。

**芳子、手に持っていた耳飾りを耳につける。**

万里江　まあ、きれいな耳飾り。それは、翡翠？
芳子　ああ、そうだよ。宣統帝夫人の婉容からもらったんだ。
健太郎　宣統帝？
田山　清朝最後の皇帝、溥儀のことだよ。
健太郎　へえ、すごいんだ。
芳子　そうだ、じゃあ、そのときの話をしよう。村西さん、いいかい？
村西　え、食事の後からじゃ？
芳子　今、話したいんだ。いけないか？
田山　支度をしろ。
村西　わかりました。

**村西、隅においた鞄のなかから、帳面とペンを取り出す。**
**芳子は、おかまいなしに話し始める。**

芳子　去年の十一月のことだ。僕は、単身、天津に乗り込んだ。男の格好をしてね。天津には、溥儀夫妻が住んでいたんだが、溥儀は一足早く十月のうちに天津を脱出していた。一人残った夫人をどうやって連れ出したものかと、満州国の国家建設をすすめていた日本軍は、大いに悩んでいたんだ。僕は、奉天特務機関長の土肥原賢二少将に呼び出された。そして、言われたんだ。「芳子さんには、お后を救出していただきたい」「わかりました。お任せ下さい」。僕は、天津の溥儀夫人の屋敷で、何日かを一緒に暮らした。だが、支那との闘いはますます激しくなって、天津の租界もあちこちで銃弾がとびかっていた。

**話が始まると、村西は帳面になにやら書いている。**
**それをのぞき込んでいる田山。迷惑そうな村西。**

芳子　ある晩、僕は后を連れ出すことに決めた。広間の時計が午前一時を回った頃、僕は后にこう言ったんだ。「それでは出かけましょうか」。屋敷の裏の塀ぎわには、真っ黒なクーパー型の自動車を横付けにしてある。「さあ、お乗り下さい」。その時、后が言ったんだ。「芳子さん、犬を連れていかなくては」「犬？！」。婉容は、大の犬好きで、大きな洋犬をいつも連れていた。真っ白な犬だ。僕は、勝手口から外

に出て、后と犬を車に乗せた。ところが、後部座席の犬と后は目立ってしかたない。僕は、后に「しばらくご辛抱いただけますか」とささやいて、車のトランクに后と犬を詰め込んで、ばたんと蓋をすると、走り出したんだ。車を運転したのは僕だ。ヘッドライトもつけられなかった。目くらめっぽうに走った。目指すのは、港に停泊中の貨物船。そこまでたどりつけば、あとはうまくいく。街頭は全部消された真っ暗な街。一人の通行人もなく、時折、激しい鉄砲の音だけが耳をつんざくように聞こえた。ようやく海岸に近づくと、埠頭にたった一つだけアーク灯が輝いていた。僕はそれを目標にして、ひたすら車を走らせたんだ。

村西　（田山に）ちょっとやめてもらえますか？

田山　そんな汚い字で後で読めるのか？

村西　読めますよ！　一語一句違いのない話がお望みなら、レコードにでもしたらいいでしょう？

芳子　（田山に）一番いいところなのに、貴様はどうして茶々を入れるんだ？

田山　え、おれ？

万里江　いいわ、じゃあ、村西さん、書くのはやめにしましょう。こんなにわくわくするお話、一度聞いたら、忘れられないわ。映画みたいだもの。ねえ、そうしましょうよ。ねえ、キャシー？

芳子　ああ、そうしてくれるとありがたい。

村西　わかりました。

**村西、帳面を閉じる。**

健太郎　続きを。

芳子　じゃあ。車は、なんとか客船が待つ埠頭にたどり着いた。待っていた男に合図すると、男が客船に合図を送った。小さな舟がやってきた。僕はトランクを開けて、后と犬を外に出した。港の潮風の中、后がつけているフランスの香水と、お気に入りのアヘンのにおいが立ち上った。「さあ、お降りください。無事に到着しましたよ」后はとろんとした目で僕を見て言った。「ありがとう。芳子さん。お礼にこれをあげましょう。」そう言って、僕にこれをくれたんだ。この恐ろしい夜の冒険の記念としてね。

**一同、拍手をする。**

田山　さすがは川島芳子。満州帝国建国の大立者だ。

健太郎　そんなことがあったんですか。すごいなあ。

田山　これは機密事項だ。他言無用だぞ。

健太郎　はい。

芳子　何、かもうもんか。村西さん、どんどん書いてくれたまえ、そのために頼んだんだ。

田山　あ、そうか。
村西　これは、いい場面になると思いますよ。
芳子　頼んだよ。
万里江　そんないわくのある耳飾りだったのね。
芳子　あ。そうだ。マリー、やろうか？
一同　え？
芳子　君にやるよ。ほら。

**と耳飾りを万里江に差し出す。**

万里江　……もらえないわ。
健太郎　じゃあ、僕が。
万里江　だめ！　その耳飾りは、清朝の王女にこそ、ふさわしいものだわ。
村西　大事に持っていた方がいい。
芳子　そうかい？　僕はちっともかまわないんだが。じゃあ、代わりといっては何だが、朝飯をおごろう。
田山　朝飯って……
芳子　南京路の太閤飯店だ。
村西　僕たちは昼飯をもう済ませたんだが……
芳子　（田山に）山本を一足先にやって支度をさせろ。
田山　ああ、わかった。全員だな？
芳子　きまってるだろ。
田山　（出て行って）山本！
芳子　（健太郎に）あの店は上等のフカのヒレを出すんだ。一度食ってみたらいい。こたえられんぞ。
健太郎　ありがとうございます。気前がいいなあ！
千鶴子　みなさま、まいりましょう。

**芳子、健太郎、千鶴子、出て行く。**

**間。**

村西　ほんとにくれる気だったのかな、耳飾り？
万里江　さあ？　いいわ、ごちそうになることにしましょう。

**二人、出て行く。**

＊　＊　＊　＊　＊

## 三場

翌日の朝方、五時過ぎ。
まだ薄暗い。
部屋に入ってくる芳子と万里江。
芳子、酔っぱらっているらしい。

万里江　大丈夫、キャシー？　（スタンドの明かりをつける）お水持ってこようか？
芳子　いや、いらない。
万里江　あんなに飲んじゃ体に悪いわ。ウィスキーの飲み比べなんて。あんなに体の大きなフランス人と。
芳子　でも、勝っただろ。
万里江　あなたが川島芳子だってわかったから、途中でやめたんじゃないの。
芳子　なんだそうか。いくじなしめ。

芳子、寝椅子に倒れ込む。

万里江　ねえ、そこは村西さんのベッドよ。あんたの部屋はあっち。
芳子　村西はどうした？
万里江　いつの間にかいなくなったわね。
芳子　逃げたのか？
万里江　まさか、昨日、あんなに田山少佐に言われたんだもの、ちゃんと帰ってくるでしょ。
芳子　いくじなしめ。
万里江　ちょっと起きて。部屋で寝てちょうだい。

芳子、起きない。

万里江　もう、なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないの。
芳子　千鶴子はどこだ？
万里江　いないわよ。心配してずっとついててくれたの、あんたがいいから帰れって無理矢理帰したんじゃないの！
芳子　そうか。マリー、いいからもう寝ていいぞ。
万里江　そんなことといちいち言われなくても寝ます。だから、あんたも寝てちょうだい。

芳子　僕はいい。
万里江　もしかして、ここであの人待ちかまえようって魂胆？　ちょっとやめて。ねえ、起きなさいってば。
芳子　いちいちうるさいな。わかってるから、もう寝ろよ！

**芳子、起きない。**

万里江　いいわ。じゃあ、私もここにいるから、あんたが部屋に行くまで。

**万里江、イスに腰掛けて芳子を見ている。**

芳子　今、何時だ？
万里江　もう五時過ぎよ。
芳子　そうか。朝か。
万里江　外の空気吸ってみたら？　上海の朝は、気持ちがいいわ。夜の間のごたごたがきれいになくなったみたいな、涼しい風が吹いて。一日でこの街が静かなのは、この時間だけね。
芳子　松本の朝も静かだったな。
万里江　松本？　ああ、あなたが育った。
芳子　山の中の田舎町。いつも、爽やかな森の匂いがしてたな。朝は特に。
万里江　そう。
芳子　朝早く、馬に乗って女学校に行ったもんだ。屋敷から、林を抜けて、街なかへ。馬のたてがみが風になびいて、獣の匂いがうっすらとした。道行く人は驚いて、僕たちを見ていた。「あれは誰だ？」「川島芳子だよ」「ああ、清朝の王女の」。校門に着いたら、校長が待ちかまえていた。立ち入り禁止だって。退校処分だって。髪を切ってどこが悪い。男の格好して何が悪い。馬で学校に行ったからってそれが何だっていうんだ。ふんそんなところ、こっちから願い下げだ。やめてやる。

**芳子、また目をつむる。**

万里江　やめて、また寝るのは！
芳子　……。
万里江　ねえ、キャシー、これから二月、一緒に暮らすんだから、話しておくけど、自由気ままはほどほどにしてちょうだい。ここは私の家なの。ああ、わかってる、あんたが家賃払ってくれたけど。でも、私には、責任があるの。村西さんに約束したから。わがままがしたいなら、お屋敷に帰ってちょうだい。いい小説を書いてほしいんでしょ？　だったら、ちゃんと考えてくれないと。

芳子　僕が自由気ままだって？　こんなに気を遣ってるのに。
万里江　やめて、とぼけるの。あなた、先々月、店に来たとき、みんなの前で言ったわよね。「僕は、この店ではダンサーのキャシーだ。川島芳子だということは忘れたいと思っている。そのつもりでつきあってくれ」って。あれは嘘だったの？
芳子　嘘じゃないさ。そのとおりしてるじゃないか。でも、小説の話をするときは、川島芳子だ。しょうがないじゃないか。
万里江　そういうこと。わかったわ。じゃあ、川島芳子さんに聞くけど、なんでまた小説を出すの？　私、前に読んだわよ。講談倶楽部に連載された「男装の王女」。清朝の復辟を願う、あなたのこと、とても素敵に書いてあった。
芳子　あんなくだらん雑誌読むのか？
万里江　ねえ、どうしてなの？
芳子　（起き上がって）もう、僕は落ち目なんだとさ。満州帝国が日本軍の後ろ盾で誕生して、溥儀が皇帝になった。
万里江　よかったじゃない。あなたの夢がかなったんじゃないの？
芳子　そうなのか？
万里江　私に聞かないで。
芳子　僕の役目は終わったんだって、日本軍の連中はみんな言ってる。そうなのか？
万里江　だから、私に聞かないでって言ってるでしょ。
芳子　違う、絶対に違う。僕の仕事はまだ終わってない。まだまだ何でもできるんだ。それをわからせてやるんだ。日本の連中に。
万里江　それで小説を？
芳子　ああ。満州帝国が生まれたからこそ、日本と中国が一触即発で戦争が始まるかもしれない今だからこそ、どれだけ、僕が必要か。思い知らせてやる。
万里江　だったら、村西さんにもっと協力してあげないと。田山少佐にだって、やさしくしてあげたっていいんじゃないかしら？
芳子　お前に、そんなこと言われる覚えはないね。
万里江　そうね、たしかに。じゃあ、私もう寝るわ。あなたのせいでくたくたになってる人間がここにもいるってこと忘れないで。

**万里江、部屋に向かう。**

芳子　マリー。
万里江　なに？
芳子　金天一（チン・ティエンイー）っていう男を知ってるか？
万里江　え？
芳子　大連で会った、中国人だ。黒竜江省生まれの。

万里江　金（きん）さんを知ってるの？
芳子　ああ。天津から婉容を連れ出したあと、僕も一緒に舟に乗って、大連まで行ったんだ。金は、僕と一緒に婉容を天津から連れ出した李国雄（り・くにお）の幼なじみなんだそうだ。
万里江　一緒にって、あなたが一人でやったんじゃなかったの？　溥儀夫人の天津脱出。
芳子　一人でなんてできるわけないだろ？
万里江　でも、昨日の話じゃ。
芳子　その方がおもしろいじゃないか。
万里江　そうね、たしかに。で、金さんは？
芳子　ああ、李に誰か日本語の達者な中国人はいないかと話したら、日本から帰ったばかりの金を紹介してくれたんだ。
万里江　今は何を？
芳子　婉容に日本語を教えることになったんだが、婉容がこの男は気に入らないと言って首になった。
万里江　どうして？　あの人の日本語、とても達者なのに。
芳子　溥儀が惚れちまったんだよ。金の男ぶりにね。
万里江　？
芳子　知らないのか？　溥儀は男色だ。婉容とも名ばかりの夫婦なんだ。だから、大事な后を放り出して、一人でさっさと逃げてしまった。婉容は、金を自分の側近にしたいという溥儀の申し出を断って、すぐに金を首にしたんだ。
万里江　そうなの。
芳子　たしかに、いい男だ。役者にしてもいいくらいの。マリーも惚れてたんだろ。
万里江　違うわよ。それで、金さんは今？
芳子　故郷に帰ったんじゃないか？　そこまでは僕も知らないね。
万里江　そう、ありがとう。キャシー。大連で別れた切りで、どうしたかしらって時々思い出してたの。
芳子　マリーのこともいろいろ聞いたよ。
万里江　……。
芳子　それは秘密なのかな？　サイレントの女形の俳優だったんだって。女形ってことは、マリーは男ってことなのかな？
万里江　……。
芳子　川野万里江っていう女形の俳優と一緒に、大連まで来たんだって、金は言ってたんだ。川野万里江？　聞いたことがない、脇役の女形だろう。でも、上海に来て、あんたに会ったとたんに思い出したんだよ。僕は、あんたの映画を見たことがある。沢村源之助主演のサイレント。粋な芸者の紀伊國屋の妹分だ、あんたは。そして、名前も同じ川野万里江。なんで、内緒にしてるんだ？

万里江　内緒って、何を？
芳子　男だってことを。
万里江　キャシー、悪いけど、違うわ。私はもう男じゃないのよ。金さんから聞かなかった、川野万里江は、北京に行ったって。北京に行って、宦官の手術を受けるつもりだって。
芳子　宦官？
万里江　そうよ、中国四千年の歴史が生んだ、素敵な生き方。男が男じゃなくなる手術。今も、北京の街には、紫禁城を追い出された宦官たちがひっそりと生きてるわ。
芳子　ほんとうに受けたのか、その手術？
万里江　ええ。だから、もう、私は女なのよ、悪いけど。
芳子　なるほど。たいしたもんだ。誰も知らないんだろ、そのことは？
万里江　何で話さなきゃいけないの？　私は生まれ変わったんだもの。男だった自分とはすっかり縁を切ったの。
芳子　なんで、女になりたかったんだ。
万里江　私、女優になりたいの。映画がみんなトーキーになって、女形の俳優は行き場がなくなった。女優として使ってほしいって、誰に頼んでもダメ。私の居場所はなくなったの。だから、手術を受けて、女優として再デビューしたいのよ。
芳子　そうか。そうなんだ。じゃあ、今の話は、秘密にしておいた方がいいかな。
万里江　ええ、そうね。
芳子　そうか。わかった。マリー、ぼくたちは、いい友達になれるんじゃないか？
万里江　……。
芳子　紫禁城を無血開城したのは、僕の養父、川島浪速だ。清朝が滅びなければ、あんたも手術を受けられなかったかもしれない。これは、縁があるんじゃないかな？
万里江　何が言いたいの？
芳子　友達になろうじゃないか？　どうだい？　悪いようにはしないよ。僕たちは、同じ立場じゃないのかな。願っていることも同じ、再デビューだ。
万里江　どうしてほしいの？
芳子　別に何も？　ただ、知っていてほしいんだよ。あんたのことを、僕が知ってることを。
万里江　脅す気？
芳子　まさか。何度も言ってるだろ。友達になろう。

**村西が、入ってくる。**

万里江　あら、お帰りなさい。
村西　（芳子に）あ、なんでここに？

芳子　マリーとちょっと話してたんだ。でも、もう寝るよ。話はすんだから。
村西　そうか。
芳子　じゃあ、マリー、お休み。
万里江　お休みなさい。
芳子　今日はぐっすり眠れそうだ。
万里江　キャシー！

**芳子、部屋に入りかけていたが、立ち止まる。**

万里江　……蓄音機、まだ壊れたままだから、目覚めのムーンライトソナタは無理かもしれないわ。
芳子　何、かまわない。いい朝だ。気持ちよく、起きることができそうだ。じゃ。お休み。

**芳子、退場。**

村西　どうしたんだ？
万里江　別に。お休みなさい。

**万里江、退場。**

＊　＊　＊　＊　＊

## 四場

一ヶ月後。五月の中旬。
夜八時過ぎ、マリーの部屋。
健太郎が一人でいる。蓄音機の修理をしているところ。
慎重にハンドルを回してぜんまいを巻いてみる。
とレコード盤が回り出した。

健太郎　やった！

健太郎、針を降ろしてみる。
流れ出す、タンゴ。
健太郎、踊ってみる。

前よりは、ずいぶん慣れたかんじのダンス。今日もまた、イスを相手に。
と、ドアが開き、どやどやと芳子たちが入ってくる。
芳子を先頭に、万里江、村西、品子、千鶴子。

健太郎　おかえりなさい。
万里江　あら、直ったの蓄音機？
健太郎　はい。新しいゼンマイに交換しました。もう大丈夫です。
芳子　そうか、それはよかった。
千鶴子　これで、芳子さまをいつものようにお起こしすることができますね。
芳子　うちから持ってきた蓄音機を枕元に置いたのはいいが、耳元で鳴らされるとたまらない。毎朝たたき起こされるようだ。
万里江　それにしてもずいぶんかかったわね。もう、かれこれ一ヶ月。
健太郎　この蓄音機は一九二一年製造なんです。もう、ずいぶん前のなんで、部品の在庫がなくなっていて。
村西　壊れるはずだな。
品子　キャシーに新しいの買ってもらえばいいのに。
万里江　それが大家がきかなくて。こわしたのはあんたなんだから、ちゃんとなおせって。私のせいじゃないわよね。
品子　でも、ちょっと使いすぎだったんじゃない？　毎日のダンスの練習で。
万里江　おんぼろなのがいけないのよ。
芳子　千鶴子、じゃあ、明日からは、この蓄音機で頼む。
千鶴子　はい、かしこまりました。

ドアをノックする音。

万里江　少佐かしら？　どうぞ。

入ってきたのは、大家。

林　（中国語で）直ったのかい。それはよかった。（修好了吗？　那太好了。シュー$_{1}$ハオ$_{3}$レ$_{4}$マ$_{1}$？ナ$_{4}$タイ$_{4}$ハオ$_{3}$レ$_{4}$。）
万里江　（中国語で）ようやくね。
林　（中国語で）うーん、いい、音だ。（嗯…声音不错！　ウン…シェン$_{1}$イン$_{1}$ブ$_{4}$ツオ$_{4}$。）

林、蓄音機に手を触れながら、耳を近づけて聞いている。

万里江　何、うっとりしちゃって。（中国語で）これで満足？（满意了吗？　マン$^{3}$イ$^{4}$レ$^{4}$マ$^{1}$？）

健太郎　あの、それで修理代なんですが……

万里江　わかったわ。いいところに来たわね。いくら？

健太郎　それじゃあ、一二〇元で。

万里江　そんなに？

健太郎　取り寄せるのに船賃もかかってますし、僕の工賃も。

万里江　いいわ、出させましょう。（中国語で）ねえ、修理するのに一二〇元かかったの。あんたが直せっていうから、直したんだから、払ってちょうだい。（哎！　修理总共花了一百二十元。也是你要我修理的，所以你来付钱。エイ！　シュー$^{1}$リ$^{3}$ジョン$^{3}$ゴン$^{4}$ホア$^{1}$レ$^{4}$イ$^{1}$バイ$^{3}$エ$^{4}$スー$^{2}$ウェン$^{2}$イエ$^{3}$ス$^{4}$ニー$^{3}$ヤオ$^{4}$ウォ$^{3}$シュー$^{1}$リ$^{3}$デ$^{4}$、スォ$^{2}$イ$^{3}$ニー$^{3}$ライ$^{2}$フ$^{4}$チェン$^{2}$。）

林　（中国語）こわしたのは、あんただろ。あんたが払いな。（弄坏的是你！所以应该你付钱。ノン$^{4}$ホアイ$^{4}$デ$^{4}$ス$^{4}$ニー$^{3}$。スォ$^{2}$イ$^{3}$イン$^{1}$ガイ$^{1}$ニー$^{3}$フ$^{4}$チェン$^{2}$。）

万里江　（中国語）私はこんなのお払い箱にしてもよかったのよ。（这种东西！我原本是可以扔掉的！ジェ$^{4}$ジョン$^{3}$ドン$^{1}$シ$^{1}$！　ウォ$^{3}$ウェン$^{2}$ベン$^{3}$ス$^{4}$コ$^{2}$イ$^{3}$レン$^{1}$ディヤオ$^{4}$デ$^{4}$。）

林　（中国語）なんだって？（你说什么？　ニー$^{3}$シュオ$^{1}$シェン$^{3}$モ$^{4}$？）

万里江　（中国語）払いなさい。（付钱！　フ$^{4}$チェン$^{2}$！）

林　（中国語で）いやだね！　そうだ。また、あの男に払ってもらったらどうだい？出すんじゃないか？（打死我也不付！　对了，你叫那个男的付不就行了吗？　他会付吧？　ダー$^{2}$ス$^{2}$ウォ$^{3}$イエ$^{3}$ブ$^{4}$フ$^{4}$！　ドイ$^{4}$レ$^{4}$、ニー$^{3}$ジャオ$^{4}$ナ$^{4}$ゲ$^{4}$ナン$^{2}$デ$^{4}$フ$^{4}$　ブ$^{4}$ジュ$^{4}$シン$^{2}$レ$^{4}$マ$^{1}$？　ター$^{1}$ホイ$^{4}$フ$^{4}$バ$^{3}$？）

万里江　え？

品子　なんだって？

万里江　また、村西さんに払ってもらったらいいだろうって。（中国語で）それはだめ。（那不行。ナ$^{4}$ブ$^{4}$シン$^{2}$。）

林　（中国語で）じゃあ、あの女は？（那…那个女的呢？　ナ$^{4}$…ナ$^{4}$ゲ$^{4}$ヌイ$^{3}$デ$^{4}$ネ$^{1}$？）

万里江　（中国語で）そりゃ、あの人は払ってくれるかもしれないけど、そんなのおかしいでしょ？（那个…她或许会付，但那太怪了吧？　ナ$^{4}$ゲ$^{4}$…ター$^{1}$ホオ$^{4}$シ$^{3}$ホイ$^{4}$フ$^{4}$、ダン$^{4}$ナ$^{4}$タイ$^{4}$グァイ$^{4}$レ$^{4}$バ$^{3}$？）

林　（中国語）何がおかしいんだい。払いたいやつが払えばそれでいいじゃないか？（有什么怪？让想付的人来付不就行了吗？　ヨイ$^{2}$シェン$^{3}$モ$^{4}$グァイ$^{4}$？　ルァン$^{4}$シャン$^{3}$フ$^{4}$デ$^{4}$レン$^{2}$ライ$^{2}$フ$^{4}$ブ$^{4}$ジュ$^{4}$シン$^{2}$レ$^{4}$マ$^{1}$？）

品子　なんだって？

万里江　払いたいやつが払えばいいって。

芳子　じゃあ、僕が。
万里江　だめ！　絶対にだめ。
健太郎　僕は誰からもらってもいいんですけど。
万里江　そう、じゃあ、この人からもらって。
健太郎　でも……
万里江　平気よ、紙に書けば。この人ね、リンメイジャオっていうの。顔に似合わないきれいな名前。字はこうよ。林に美しい愛嬌の嬌。おばあちゃんって呼ぶときは、林婆婆（りんぽーぽー）ね。
林　（中国語で）呼んだかい？（你叫我呀？　二ー[3]ジャオ[4]ウォ[3]ヤ[2]？）
万里江　呼んでないわ。（健太郎に）あとはよろしく！
健太郎　よろしくって……。

**リンメイジャオ、一同をぐるっと見回すとしれっと部屋を出て行く。**

品子　健ちゃん？
健太郎　今日はいいです。

**健太郎、レコードを止める。**

万里江　ねえ、健ちゃん、中国語もダンスも努力することが大事よ。そうだ、ダンスと一緒に中国語も教えてあげようか？　安くしとくから。
健太郎　けっこうです。それで、映画はどうでした？　グレタ・ガルボ主演の「マタ・ハリ」。
品子　すごかったよ。田山少佐が用意してくれた、ロキシーの貴賓席。ソファなんてふかふかで。キャシーのおかげね、ありがとう！
芳子　ふん、なんで貴賓席ってやつは、ああスクリーンから遠いところにあるんだ。あれじゃ映画を見るんだか、人の頭を見るんだかわからない。
万里江　キャシーは、有名なんだもの、何が起こるかわからないから。
芳子　映画は一番前で見たいんだ。映画だけを一人で見たい。
品子　じゃあ、自分専用の映画館をつくればいいんじゃない。お屋敷の中に！
芳子　ああ、そうだな、そいつはおもしろい。千鶴子。
千鶴子　はい、田山少佐にお伝えいたします。
万里江　だめよ、そんなのつまらない。映画はやっぱり大きな映画館の真っ暗な客席で大勢の人たちと一緒に見るからおもしろいのよ。一人でなんて。
村西　それに、芳子くんだって、まんざらでもなかったんじゃないか？　貴賓席から満員の客席に向かって手を振ってる姿は、ずいぶんうれしそうだった。

間

品子　みんな、喜んでたねえ。
万里江　そりゃそうよ、「東洋のマタ・ハリ」と言われる川島芳子が、ガルボが演じる「マタ・ハリ」を見にきたんだもの。
健太郎　それで映画はどうでした？
芳子　駄作だ。くだらんね。
健太郎　そうだったんですか。
万里江　キャシー、ずっと怒ってるのよ。ご機嫌ななめ。
品子　私はおもしろかったな。
芳子　何がマタ・ハリだ。あんな女スパイがいるもんか。思い出してもむかむかする。
村西　まあ、ガルボの作品としては二流だな。
万里江　そうね。たしかに。
健太郎　あの、だから、どんな映画だったんですか？　僕見てないんで。みなさんが、田山少佐の招待でロキシーの貴賓席で映画見物してるあいだ、僕はこの蓄音機直してたんで。
村西　見に行ったらいいだろう。
万里江　そうよ、品ちゃんと一緒に。
健太郎　あ、そうか。
品子　私もういい、見ちゃったから。
健太郎　ええ？　じゃあ、教えてよ、どんなだったか？
品子　ええとね、グレタ・ガルボが、踊り子でね、実は女スパイなの。
健太郎　うんうん。
品子　それで……最後、処刑されちゃうの。
健太郎　途中は？
品子　ええ？　もう、一人で見ればいいじゃない。
健太郎　品ちゃん……。
村西　大戦の終わりにドイツのスパイとして活躍していたマタ・ハリは、ロシアの青年将校ロザノフ中尉に惚れてしまってね、彼のために処刑されるんだ。
万里江　素敵なラストだったわね。目が見えなくなったロザノフ中尉をマタハリが見舞うの。目が見えない中尉は、囚人姿のマタ・ハリに気がつかないの。マタ・ハリも自分が処刑されるんだってことを中尉に悟らせまいとして明るく振る舞う。
品子　そうそう。私、泣いちゃった。
芳子　本当のマタ・ハリはあんなもんじゃない。
村西　初めの方のダンスのシーンなんかは豪華でよかったんじゃないか。衣裳も、ダンスも見事だった。

品子　そうそう。私もあんなドレス着てみたいと思った。
芳子　わかってないんだな。マタ・ハリは女である前に、スパイじゃなきゃならんのだ。それをなんだ。あんなスパイがいるもんか。あんなんじゃ、つかまって当然だ。大体、あんなろくでもない男にほれてる理由がわからん。バカかあの女は。
万里江　映画だから。
芳子　いくら映画でもひどすぎる。マタ・ハリはもっと優秀なスパイだったはずだ。
品子　でも、それじゃおもしろくないから、ああいうお話にしたんじゃないの？
芳子　なんだと？
品子　ごめんなさい。
万里江　たしかに事実は小説より奇なりってことはあるかもね。本当のマタ・ハリもものすごい美人だったっていうし。ガルボもきれいだけど。
健太郎　処刑されるとき、マタ・ハリの美しさに惑わされないよう銃殺隊は目隠しをしたって話、聞いたことあるなあ。
万里江　目隠ししたら撃てないんじゃない？
健太郎　あと、銃殺寸前にコートの前をはだけて、全裸で殺されたっていううわさも。
品子　健ちゃん！
芳子　なんで、そういうところを映画化しないんだ。いっそその方がおもしろい。
健太郎　ですよね？
万里江　たしかにね、もっとかっこいい女スパイぶりを期待してたのに、なんだかね、普通の女以上に女なの。
村西　それはしかたないだろ。「女」スパイなんだから、「女」の部分を強調しないわけにはいかない。
芳子　なんでだ？　なんで、女を捨てた女スパイを描かないんだ。まったく腹が立つ。ああ、そうだ。僕のことを「東洋のマタ・ハリ」なんて呼ぶのは、金輪際やめてもらいたい。
一同　ええ？
村西　それは困る。今度の小説の題名は、「東洋のマタ・ハリ」で行こうと思っているのに。
芳子　違う題名を考えてくれ。もう一月もいろいろ話したんだ。僕が、あんな女とは全然違うってことが、よくわかっただろ？　二本であの映画が公開されたら、人は「東洋のマタ・ハリ」という言葉を聞く度に、あのバカ女を思い出すに違いない。そんなの願い下げだからな。
村西　それはそうだろうが……
芳子　女を捨てた女スパイっていうところも頼むよ。まあ、そのへんは心配してないが。僕は女をすっかり捨ててるからな。
村西　……。
万里江　そうね、たしかに。

村西　しかし、題名は……
千鶴子　先生、お願いいたします。芳子さまのおっしゃるとおりに。
村西　わかったよ。じゃあ、題名を新しく考えることにするか？
芳子　そうしてくれたまえ。千鶴子、着替えを。
千鶴子　はい。芳子さま。
芳子　マリー、今日は新世界はやめて、桃山に行こうと思う。君も来るかい？
万里江　行ってらっしゃい。私はいいわ。仕事に行かないと。
品子　私も。
芳子　そうか、じゃあ。

**芳子と千鶴子、部屋に退場。**

村西　何が「女を捨てた」だ。あんなに女女した女もいないと思うがね。
万里江　たしかにそうね。自分のことすっかり棚にあげちゃって。
村西　なんだ、じゃあ、なんであんなこと。
万里江　言わせておいてあげましょう。
健太郎　僕、川島芳子っていえばいつも男装だって聞いてたんですけど、この頃、ずっと女の格好ですよね？
万里江　そうね。引っ越してきてから、一度も見てないわ、軍服姿。
村西　ひまなんだろ。軍部ももてあましてるんだよ。あの女のわがままぶりは。
健太郎　そうなんだ。一度くらい見てみたいな。
村西　そうか、まあ、そうだよな。川島芳子と会ったって言ってもいつも普通の女の格好じゃ、自慢話にもならないもんな。
健太郎　そうなんですよ。かっこいいんですか？
村西　まあね。
健太郎　そうか。
村西　初めて会った時はびっくりしたな。大した美青年だった。
万里江　いつのこと？
村西　今年の一月、上海事変のすぐ後だ。田山少佐に、川島芳子を紹介すると言われた。上海駐在公使館の前で待っていたら、黒塗りの車が止まった。ドアが開くと、軍服姿の青年が下りてきた、色の白い美青年だ。僕の方を見て、人差し指で少し帽子を持ち上げて言った。「やあ、あんたが村西敏雄かい。僕が川島芳子だよ。」

**村西の話の間に、下手のドアが開いて、軍服姿の女が登場する。**
**話のとおりに、人差し指で帽子を持ち上げている。**
**一同、唖然として見ている。**

万里江　あ、あなたは……
女　僕かい、僕は清朝の第十四王女、愛新覚羅顕子、川島芳子だ。
健太郎　川島芳子？　ホンモノですか？
女　ああ、近頃は、ニセモノが出回ってるらしいがね、僕はほんものだ。
健太郎　それじゃあ……。

上手のドアが開いて、芳子と千鶴子が登場。

間

女、芳子に近づく。
芳子、女を見たまま、立っている。

＊　＊　＊　＊　＊

## 五場

万里江の声　影武者？

舞台が明るくなると、前の場面のすぐ後。
前場の面々に加え、田山少佐と山本がいる。
さっき入ってきた男装の女が、なんでもなく座っている。

田山　そうだ。川島芳子のね。紹介しよう、梅原早苗くんだ。
早苗　（ていねいに）初めまして、どうぞよろしくお願いいたします。
健太郎　さっきと全然違う。
早苗　はい、芳子さんと田山少佐にいつも男装をしているように、男言葉で話せと言われているんですが、私、本職はただの従軍記者ですので、別に男言葉で話す必要もありませんから。
万里江　じゃあ、なんでさっき？
早苗　芳子さんに、そのように登場しろと連絡をいただきましたので。どんなもんでしょうか？　私の男装？
芳子　なんで、すぐやめてしまうんだ？　そんなんで、僕の影武者がつとまるのか？
早苗　申し訳ありません。努力はしてるんですが……

田山　何、心配はいらんよ。大事なのは、この男装だからな。（一同に）この人は、なかなかのやり手でね、どこにだって飛び込んでいくんだ。この一月に始まった上海事変、２月に起きた上海郊外を舞台にした爆弾三勇士の美談、あれをまっさきに日本に送ったのは、この人なんだからな。

品子　私、映画見ました、爆弾三勇士。

健太郎　僕も日本で見ました。点火した爆弾持って、敵の陣地を突破して、見事爆死した三人ですよね。そうなんだ、あなただったんですか？！

万里江　影武者って、あなた、いつも「僕が川島芳子だ」って言って歩いてるの？

早苗　いえ、さすがにそれは。ただ、聞かれたら、否定しないようにと。

芳子　そう。別に名乗らんでもいいから、だまって微笑んでおけばいい。余計、謎めいてくるからな。

早苗　そうなんです。私、何も言っていないのに、取材で入った街をしばらく歩くと、あちこちで人だかりがしてるんです。何事かと思うと、私を見て、こそこそ話をしています。そのうちに、一人が勇気を出して、近づいてくると、尋ねるんです。「川島芳子さんですか？」。聞いてくるのは主に日本人ですけど、こっちの人間もおんなじです。それも行く先々で。おかげさまで、取材がしやすいことと言ったらありません。

芳子　そうか。それはよかった。

村西　そんなことまでやってるんですか、日本軍は？

田山　ああ、これはある種の情報戦だ。神出鬼没の川島芳子という存在を、中国全土に広めるんだ。

村西　なるほど。

芳子　この人だけじゃないんだ。特にこの上海には、男装の女たちが何人もいる。阿片王と呼ばれる里見甫（たもつ）のところにはね。そいつらにも、ちゃんと言い含めてあるんだ。もし「川島芳子か？」と尋ねられたら、否定しないようにと。

健太郎　すごいなあ。

早苗　でも、なかなか、芳子さんのようにはいきません。私、馬に乗るのは本当に苦手で。川島芳子と言えば、さっそうと馬に乗って、風のように駆け抜けるという印象がありますけれども、うまくいかないんです。

芳子　乗馬の練習をずいぶんさせてやったじゃないか？

早苗　そうなんですけれど、なかなか慣れなくて、それでも無理して乗っていたら、ちょっと……

芳子　どうしたんだ……

早苗　お恥ずかしいんですけれども、痔になってしまいまして。近頃は、もう歩くのも大変で。

村西　痔？

山本　女性にはなかなかきびしいのかもしれません。馬での行軍は、男でもずいぶんつら

いものです。

田山　いい医者を紹介しよう。芳子が通っていたところだ。芳子も、去年の暮れにはずいぶん苦しんでいたが、もうすっかりよくなったんだろう？

万里江　あら、キャシーも痔？

芳子　（田山に）余計なことを言うな。（早苗に）さっさと治療して、その話はもう二度としないように。

早苗　はい、わかりました。それで、村西敏雄先生が、芳子さんの小説をお書きになるとか？

村西　なぜそれを？

早苗　私の知り合いが婦人公論の編集部にいまして。なんでも、社運をかけた計画だそうですね。私までなんだかわくわくしてしまいまして。

芳子　早苗くん、僕はここに寝泊まりして、毎日、村西さんに僕のこれまでの冒険の数々を話しているんだ。君が見てきたことも、話してやってもらえないかな？

早苗　私がですか？

芳子　ああ、そうだ。僕が知らないことも君はずいぶん見てきてるんじゃないか？　どうだい、一緒に？

早苗　はい……。

村西　（田山に）田山さん、僕は、川島芳子のことを書くんですよね？　そういう約束でしたよね？

田山　ま、いいんじゃないか？　たかが小説、嘘もほんともなんでもありということで。

村西　嘘とはなんですか？　じゃあ、なんで僕は、この人の話を延々聞かされなきゃならないんです？

田山　仕事だ、仕事！

万里江　村西さん……

村西　……わかりました。二人まとめて引き受けますよ。

**村西、立ち上がって、部屋を出て行こうとする。**

万里江　どこ行くの？

村西　散歩だ、散歩。

**村西、出て行く。ドアは開いたまま。**

芳子　それじゃ、明日の午後から、来てくれ。僕は二時過ぎに起きるから、その後。

早苗　はい、かしこまりました。

芳子　どこに泊まってるんだ？

早苗　とりあえず、芳子さんがいつもお泊まりのブロードウェイマンションに部屋を取っていただいてはいるのですが……

芳子　そうか。じゃあ、どうだろう？　静案寺路の僕の屋敷にうつってみては？

早苗　はあ。でも……

芳子　かまうもんか、僕はどうせこっちに入りびたりなんだ。僕の代わりに、あの屋敷で暮らしてくれた方が都合がいい。なあ、少佐？

田山　ああ、そうだな、そうするといい。

早苗　ありがとうございます。

田山　山本、これからすぐブロードウェイマンションに行って、荷物を運び出せ。こっそりとな。

山本　了解であります。

芳子　千鶴子、お前も一緒に。

千鶴子　かしこまりました。

田山　では、また明日。

早苗　失礼いたします。お邪魔いたしました。

**早苗、具合が悪そうに出て行く。**
**山本と千鶴子も一緒に。**

品子　ねえ、マリーさん、私たちももう行こう。

万里江　そうね、ずいぶん遅くなったわ。このままでいいか？

品子　うん。健ちゃんも。

健太郎　（品子に）あ、ちょっと待って。（芳子に）芳子さんが行く「桃山」っていうダンスホールは、日本人がダンスの練習をよくしている店ですよね？

万里江　そうよ。客もあらかたが日本人。新世界とは客層が違うわね。

健太郎　（芳子に）ご一緒してもいいですか？

品子　健ちゃん？

万里江　だめよ、品ちゃんがこんなに焼き餅をやいてるじゃない。

健太郎　そんな。

万里江　いいから、行くわよ。それじゃ。

**万里江、品子、健太郎、出て行く。ドアは開いたまま。**

芳子　あんたは行かないのか？

田山　ああ、ちょっと話があるんだが。

芳子　なんだ？

田山　「マタ・ハリ」はどうだった？
芳子　くだらん映画だったな。
田山　そうか。俺はなかなか気に入ったんだが。マタ・ハリは実にいい女だ。そうは思わんか？
芳子　あんたはそうだろうな。途中で抜け出してどこに行ってたんだ。
田山　ああ、それなんだが……

**田山、ドアを閉める。**

田山　海軍の植松練磨少将に呼び出された。
芳子　植松さんに？
田山　最近、あの人に会ったかな？
芳子　まあね。
田山　そうか……。植松少将が言うには、川島芳子から聞いたんだが、あんたはずいぶん日本海軍のだらしなさに憤慨しているそうだなと。
芳子　あんたが？
田山　ああ、俺がだ。そして、二月の爆弾三勇士の一件も、ほんとうは爆薬の火縄を短くしたのに気がつかないでいただけなのを、お前が無理矢理美談にしたんだってと？
芳子　あんたが？
田山　ああ、俺がだ。一メートルなきゃいけなかった火縄を五十センチにしたせいの事故死だと。
芳子　それはずいぶん具体的だな？
田山　ほんとうに言ったのか？
芳子　まさか。

**田山、突然、芳子の前にひざまずく。**

田山　俺と二人のときは何を言ってもいい、俺はそれを許してきた。いや、むしろ、お前のやりたい放題を望んできた。だが、植松少将は勘弁してくれ。相手は海軍だ。俺は殺される。
芳子　殺される？
田山　嘘じゃない。植松少将にも、釘をさされた。俺が何を言ったっていうんだ。言ったのは、お前なのに？
芳子　僕が？　なんで僕が？
田山　頼む、ほんとうに頼む！

**田山、土下座する。**

芳子　もっとだ。

**田山、顔を上げる。**

芳子　もっとだよ。もっと低く。

**田山、はいつくばる。**

芳子　そうだ、それでいい。

田山　芳子さん！

**芳子にすがる田山を芳子は蹴り倒す。**

芳子　芳子さまだ！

田山　（正座して）芳子さま……

**芳子、田山の胸ぐらをつかむ。**

芳子　なんで僕がそんなことを言うんだ。何で僕が信じられないんだ。

田山　しかし、植松少将が……

芳子　違う。告げ口したのは、山本だよ。

田山　まさか……

芳子　植松さんは、言ってなかったか？　芳子がそう言ってると山本が言ってたと。

田山　いや……

芳子　山本は僕とあんたの仲を裂こうとしてる。あんたも人がいいから。気をつけたほうがいい。あの忠義面の裏になにがあるのか？　ずいぶん植松さんと親しいようだよ。

田山　まさか、そんな。

芳子　僕を信じてないのか？　僕はこんなにもお前のことを思ってるのに。

田山　……。

**芳子、蓄音機に近づき、レコード盤に針を落とす。**

**流れ出すタンゴ。**

**芳子、そのまま歩いていき、寝室のドアを開ける。**

芳子　（振り返って）来ないのか？

田山　……。

芳子　時間がないんだ。
田山　……。

芳子、部屋に消える。
田山、立ち上がり、部屋に入り、ドアを閉める。
タンゴ鳴り続けている。

＊　＊　＊　＊　＊

## 六場

翌日の午後。
千鶴子がソファに腰を下ろしている。
下手のドアから山本が登場。

千鶴子　（立ち上がって）ありがとうございました。
山本　ちゃんとお屋敷の居間に戻すようにと伝えましたから。とっても高価な舶来の蓄音機だからなと。
千鶴子　申し訳ありません、私が一緒に行った方がいいんですのに。芳子さまのお帰りを待っていないと、またご機嫌が悪くなりますから。
山本　何、信頼できる部下ですから、ご安心を。
千鶴子　毎日、毎晩、どうもお疲れ様です。
山本　千鶴子さんこそ。
千鶴子　私は、芳子さまの秘書兼小間使いですから、こんなことなんでもありません。
山本　しかし、芳子さんにお仕えするのは大変でしょう？　次に何をされるかまったく見当がつかない。昨夜だって、お屋敷に二人で早苗さんの荷物を運びこんだ後、桃山に行ってみたのに、あの人はいなかった。
千鶴子　また急なお仕事ではないでしょうかしら？　田山少佐は何も？
山本　少佐は、あの人に任務を依頼することはもうないのではないと思いますよ。
千鶴子　そうなんですか？
山本　ええ、実際にやった以上のことをあちこちでしゃべりまくる。どこまでが機密情報かわからない。昨日も、もうこりごりだとこぼしていました。
千鶴子　それにしては、しょっちゅうこちらにおいでになりますわね。
山本　しかたないじゃないですか。芳子さんには金が必要だ。その金がどこから出ているかは、ご存じでしょう？

千鶴子　あの方は、お父様から広大な領地を受け継がれていますわ。
山本　そんなものとっくの昔に川島浪速が売り払ってますよ。あの人は一文無しなんです。なのに、豪勢な暮らしができているのは、田山少佐の、いいえ、日本軍が金を渡しているからです。
千鶴子　あの方は、それだけのお仕事をちゃんとなさっていると思いますわ。
山本　まあ、そうですね。この一月の上海事変までは。準備金として渡した2万円、その後の報酬がいくらだったかは知りませんが、とっくの昔にぜんぶ使ってしまったことでしょう。あの人は、田山少佐なしでは生きていけないんですよ。
千鶴子　それは、お互いさまじゃありませんの？
山本　まあ、そうですね。

間

千鶴子　山本さんは、こんなにいつも、田山少佐のお世話ばかりでよろしいんですか？
山本　ええ、僕はあの人の部下ですから。当然のことです。
千鶴子　昨夜は何時までここにいらっしゃいましたの？
山本　……？
千鶴子　私も、桃山でお別れしたあと、こちらにやってまいりましたの。もうお休みかと思って、そっとドアを開けたら、あなたがそこにイスを置いて、芳子さまのお部屋の方をじっと見て、座っていらした。
山本　千鶴子さん……。
千鶴子　なんだか声をかけてはいけないような気がして、そのまま失礼してしまいましたの。お部屋からは、お二人の声が……
山本　……
千鶴子　お会いになれまして？
山本　いいえ。朝方までいたのですが。
千鶴子　つらいですわね。
山本　なに、仕事です。
千鶴子　そうかしら？

間

千鶴子　田山少佐のことを愛してらっしゃいますのね。
山本　は？
千鶴子　そうではありませんの？
山本　もちろん、私は田山少佐を尊敬しています。部下としては当然……

千鶴子　芳子さまがおっしゃっていましたわ。僕が少佐といるときの山本の顔を見てみろ。あいつは決して僕のことを見ない。ただ口うるさい兵隊だと思ってたが違うな。あれは恋をしている目だ。私もそのようにお見受けいたしましたわ。

山本　まさか、そんな……

千鶴子　恥じることはありません。とても立派なことだと思いますわ。お気の毒だとも思いますけれども。

山本　……。

千鶴子　つらいですわね。芳子さまは少佐を苦しめて、少佐のせいであなたが苦しんでいらっしゃる。

山本　……ええ。

千鶴子　あの方は、全部ご存じですわ。そして、それを楽しんでいらっしゃいますの。

山本　なんて女だ。

千鶴子　芳子さまは、欲張りなんです。人のものがほしくてしかたないんです。田山少佐ときっぱり別れることができないのは、あなたが苦しむようすを楽しみたいから。あの二人を別れさせようと思うのでしたら、あなたがお変わりになるしかないのではないかしら？

山本　私が……？

千鶴子　私は、去年の秋、大連で芳子さまに拾われました。みなしごだった私を、あの方は秘書兼小間使いとしてやとって下さったんです。一緒にダンスホールに行くと、あの方は私のことを「僕のワイフだ」と言って紹介してくださいます。

山本　まさか……

千鶴子　ふざけているだけ。でも、あの方は、どぎまぎする私を見て楽しみたいんです。あの方にはあの方がすることすべてをちゃんと見ている観客が必要なんです。私の役目はただそれだけ。目という役目ですの。

山本　僕にもそうなれと。

千鶴子　ええ。芳子さまはおっしゃっていますわ。山本がなんであんなろくでもない男に惚れているのかさっぱりわからんって。

山本　（強く）その言葉、そっくりそのままお返ししますよ！

千鶴子　でも、なんでですの？　私も芳子さまがおっしゃるとおりだと思いますわ。

山本　あの人の軍人としての才覚はすばらしい。しかし、人間としては最低だ。でも、目が離せない。

千鶴子　相手の欠点までもが愛しく思える。それが恋だと何かで読みましたわ。

山本　やめてください。

千鶴子　目ですわ。ただの目になること、それが一番。

**下手のドアが開いて、健太郎がやってくる。**

健太郎　あ、こんにちは。どうしたんですか、二人きりで。
千鶴子　芳子さまの部屋の蓄音機を運び出したところですの。
山本　少佐と芳子さんは、食事に出かけました。
健太郎　マリーさんも？
山本　あの人は、下で大家と話しに。蓄音機の修理代、絶対、払わせてみせると。
健太郎　ああ、よかった。
千鶴子　木島さんは？
健太郎　僕は、ダンスの練習です。
千鶴子　ずいぶん上達されましたわね。このひと月で。
山本　ゆうべ桃山で見ましたよ。踊っているところ。
千鶴子　私も。
健太郎　ええ、ほんとに？　いやだなあ、黙って見てるなんて。

**と、まんざらでもない様子。**

千鶴子　何人もの女の方に、タンゴを教えてさしあげていましたわね。お忙しそうでしたから。
山本　邪魔しちゃ悪いと思ったんで。
健太郎　そんな邪魔だなんて。
山本　あれだけ踊れたら、もう一人前ですね。もう毎日通ってくることもないんじゃないですか？
健太郎　僕が来たら邪魔ですか？
山本　私は別に、ただ……
健太郎　じゃあ、いいじゃないですか！（千鶴子に）何か、買い物に行く用事があったら、言ってくださいね。明日、市場に寄ってきますから。
千鶴子　いつもすみません……。

**万里江が入ってくる。**

万里江　ああ、もう頭来る！
健太郎　あ、マリーさん。
万里江　あら、いらっしゃい。
健太郎　あの、修理代は、どうなりました？
万里江　それなんだけど、やっぱりあんた自分で交渉して、もうちっとも話ができやしない。
健太郎　ええ？
万里江　最初は、絶対に払わないの一点張り、そのうち、私の中国語がわからないって言い

出して、次は聞こえないふり、最後には、私のこと見ようともしないのよ。

山本　さすがは上海人、なかなか手強いですね。

万里江　「さすが」なんて言わないで。あなたどっちの味方？

山本　すみません。

万里江　だから、今日はごめんなさい。悪いんだけど、帰ってもらえる？

健太郎　は？

万里江　修理代取りに来たんでしょ？

健太郎　違いますよ。タンゴです。

万里江　ねえ、もういいんじゃないかしら？　あなたこの一月、毎日通ってきて。蓄音機が壊れてるっていうのに。あれだけ練習したら、もう十分なんじゃない？　私、思うんだけど、私の授業料で、修理代払ったことにしてくれてもいいんじゃない？

健太郎　授業料はちゃんと払うって言ってるじゃないですか。蓄音機の修理代払ってくれたら。

万里江　だから、そこのところの順番逆にするわけにはいかないの？

健太郎　修理代はあの大家が払うべきですよ。

万里江　あんたもがんこね。私あんなにていねいに教えてあげたのに。もっと感謝してくれてもいいんじゃないの？

健太郎　感謝してますよ。昨夜、一人で桃山に行ってみたんですよ。僕のダンスがどれだけのものか試してみたくて。

万里江　どうだった？

健太郎　初めてここに来た日、マリーさん、言いましたよね。僕の手から、細やかな気遣いが伝わってくるって。

万里江　そんなこと言ったかしら？

健太郎　言いましたよ。昨夜わかったんです。厚化粧の日本人のおばさんたちと踊りながら、マリーさんがどんなに僕をリードしてくれていたか。

万里江　当たり前でしょ、教えてるんだから。

健太郎　だから、マリーさんのことを思い出しながら、踊ったんです。そうしたら、すごくほめられました。なんてお上手って。

山本　もてもてだ。

万里江　そう。ダンスで大事なのは、一人で踊るんじゃないってことなの。絶対に相手がいないといけない。日本舞踊なんかとは違うわね。大事なのは、どう踊るかじゃなくて、相手にどう自分の思いを伝えるかってこと。

健太郎　思いですか？

万里江　そうそう、そして、どうその思いを受け取るか。だから、ダンスは踊りっていうよりも、会話、おしゃべりに近いかもしれない。次にどっちにすすむか、決め事も言葉も何もないのに、その場その場で二人で決めていく。

健太郎　相手の目を見ながら。
万里江　そう。そこまでわかってるんなら、もう教えることはないわね。毎日毎日お疲れ様でした。
健太郎　そんな、せっかく蓄音機直ったんですから、踊りましょうよ。
万里江　あのね、私は毎晩仕事で踊ってるの。あなたも、あちこちのダンスホールに行けばいいでしょ。もう素敵なデビューは済んだみたいだし。はい、おしまい。
健太郎　そんな……

**芳子、田山、早苗、村西、品子が入ってくる。**

万里江　あら、お帰りなさい。どうしたの品ちゃんまで？
品子　南京路でばったり会って、私もごちそうになっちゃった。
万里江　あら、よかったわね。
品子　うん。
芳子　マリー、頼みがあるんだが。
万里江　なあに？　できることとできないことがあるわよ。
芳子　いや、マリーなら、簡単なことだ。この人にダンスを教えてやってくれないか？
万里江　早苗さんに？
早苗　はい。今、どうしたら、もっと川島芳子らしくなれるかということを、食事をいただきながら、少佐と芳子さんにうかがったんです。私、ダンスホールなどというところにはめったに行かないのですけれど、それじゃいけないと。
山本　でも、ダンスホールには、ほんものの芳子さんもしょっちゅう顔を出していますから、二人が顔を合わせたらまずいんじゃないですか？
田山　そのへんは大丈夫。上海では気をつけるからな。芳子がいない他の街だ。大連、新京、奉天。中国全土の田舎町が、日本人のおかげでどんどん都会化してるんだ。梅原くんには、芳子のいないところで、存分に活躍してもらいたい。
万里江　そういうわけなのね。
村西　あの、教えるのはここでですか？
田山　そうだな、その方がいいんじゃないか？　マリーも毎日屋敷まで来るのは大変だろうから。
村西　この居間は僕の部屋なんです。毎日、昼過ぎには、あの男がやってきて、タンゴの練習。それが済むと、芳子さんが起きてきて、おしゃべりにつきあう。僕は一日、落ち着かないんです。その上、まだ何かやろうっていうんですか？
千鶴子　木島さんのお稽古はもう終わったそうですよ。
健太郎　終わってません。
村西　とにかく、ここでやるのは勘弁してください。清案寺路の屋敷でやればいいでしょう？

万里江　出稽古ってことね？　わかったわ。田山少佐、その分もお稽古代に上乗せしてくださいます？
田山　ああ、いいだろう。
万里江　村西さん、大丈夫よ。もう、うるさくしないから。
健太郎　マリーさん……。
早苗　ありがとうございます。私、ダンスというものをほんとに踊ったことがありませんもので。全くの初心者なんです。それでも大丈夫でしょうか？
万里江　あら、そう？　じゃ、ちょっと試してみましょうか？　健ちゃん、レコードかけてちょうだい。
健太郎　はい。

**健太郎、レコードをかける。**

村西　おい、マリー。
万里江　大丈夫よ、ちょっとだけだから。早苗さん、いらっしゃい。私と一緒に踊って見ましょう。
早苗　私、踊れません。
万里江　だいじょうぶよ。私はリードするから。
早苗　でも……
万里江　そうだわ、みんなも踊ってみない。せっかくだから。参考になるんじゃないかしら？

**タンゴ「ジェラシー」が流れ出す。**

田山　じゃあ、芳子。
芳子　僕はいい。
田山　いいじゃないか、川島芳子がどう踊るか、見せてやらないとな。
芳子　わかったよ。
山本　千鶴子さん？
千鶴子　私、私は無理です。
万里江　そうね、着物じゃちょっと。
芳子　何、だいじょうぶ。僕と二人で踊りにいくときは、着物でだって、平気で踊るんだ。
千鶴子　芳子さま……
品子　健ちゃん？
健太郎　うん。
万里江　じゃあ、早苗さんは男役をお願い。ダンスは男と女のパートがきっちり別れてるの

よ。

芳子　マリーは女か？

万里江　当然でしょ。私の目を見てね。だいじょうぶ踊れるから。

村西　やっぱり踊るんだ……。

タンゴのメロディーが始まると一同踊り始める。
村西、あきらめて下手のイスに腰掛けて見ている。
早苗、万里江のリードでなんとか踊ってみる。
それぞれの組み合わせがそれなりのタンゴになっている。
途中、芳子と田山の組の男女のパートが逆になる。
そして、いつの間にかやってきた林美矯が、座っていた村西の手を取り、
無理矢理踊り始める。村西、踊らされてしまう。
ひとしきり踊っていると、突然、レコードが止まる。
一同の踊りもストップ。

健太郎　あれ、どうしたんだろう？

万里江　ちょっと健ちゃん、また？

蓄音機のそばに集まる、健太郎、万里江、そして、林美矯。

早苗　（芳子に）これがダンスなんですね。

芳子　ああ、そうだ。

早苗　私やれると思います。やってみます。

品子　お尻だいじょうぶ？

早苗　はい。よろしくお願いします！

芳子　……。

林美矯　（中国語で）今度こそ、ちゃんと直しておくれ！（这次一定要给我修好啊！ジェ$^{4}$ツ$^{4}$イ$^{4}$ディン$^{4}$ヤオ$^{4}$ゲイ$^{2}$ウォ$^{3}$シュー$^{1}$ハオ$^{3}$アー$^{2}$。）

万里江　わかってる。健ちゃん、よろしくね。

健太郎　……はい。

＊　＊　＊　＊　＊

## 七場

**数日後の夜中。**
**芳子を抱きかかえて万里江が入ってくる。**

万里江　やだ、重いわね。ちょっと少しは自分で歩いて！
芳子　歩けるから、放っておけよ。
万里江　歩けないから、私がこうして運んでるんでしょ？！
芳子　おーい、村西！
万里江　村西さん、ちょっと手伝って。って、いないの？
芳子　また逃げたのか？
万里江　あんた早い時間から酔っぱらってたから、早めに避難したのよ、きっと。
芳子　ふん、いくじなしめ。

**万里江、スタンドの明かりを点ける。**

万里江　もうびっくりするじゃないの、いつ店からいなくなったのかと思ったら、こんな夜中にうちの前で倒れてるなんて。
芳子　ふふふ、おどろいたか？
万里江　あんた、ここは上海なのよ、いくら門の中だって言っても、道ばたで倒れてたら、みぐるみはがされても文句は言えないんだからね。
芳子　やれるもんならやってみろってんだ。（顔をしかめて）痛っ……！
万里江　ちょっと、どうしたの？

**万里江、部屋の電気を点ける。**
**芳子、顔を背けるようにして寝椅子に座る。**

万里江　（のぞきこんで）やだ、あんた、どうしたの？　顔腫れてるじゃない？　どうしたの？　転んだ？
芳子　ああ、そうだ。顔からな。痛ててっ……！
万里江　もうバカじゃないの？　酔っぱらうのもほどほどにしなさいよ。
芳子　マリーは飲まないのか？
万里江　酔っぱらうほどにはね。あんただけよ、ダンサーのくせに酔っぱらって正体なくしていいのは。いいご身分ね。
芳子　ふん。

**芳子、寝椅子に倒れ込む。**

万里江　あんたの部屋はあっちでしょ？　ちょっとキャシー！

芳子、起きない。

万里江　まったくもう……。

間

万里江　あんた最近、飲み過ぎじゃないの？　私は別にいいけど、そのうちそんな怪我じゃすまなくなるんじゃない？

芳子　これが飲まずにいられるかってんだ。

万里江　何よ？　あ、最近、田山少佐の姿が見えないから？　もう安心したんじゃない？　もうじき約束の二ヶ月も終わるし、本来の任務に戻ったんじゃない？

芳子　あいつの仕事は僕の面倒を見ることだ。

万里江　はいはい、そうね。それでご機嫌ななめなのね。（小声で）ああ、ばかばかしい。

芳子　早苗のばかやろうめ！

万里江　は？

芳子　なんだ、すっかり浮かれちまって。大体、よってたかってちやほやするから図に乗るんだ。

万里江　何よ、あの人にあなたみたいにふるまうようにって言ったのはあんたでしょ？　ダンスもずいぶんうまくなったし。何が気に入らないの？

芳子　何もかもだ！

万里江　はい。そうね。

間

芳子　なんでだまる？

万里江　話すことないもん。あんたも話すことないなら、寝なさい。

芳子　いやだ。

万里江　何か言いたいことあるなら、言いなさいよ、聞いてあげるから。

間

芳子　あの映画見たか？「間諜Ｘ２７」

万里江　見たわよ、去年。ディートリッヒ主演の女スパイもの。なんだ、あんた、あれ見て怒ってんの？

芳子　違う。あれは、ましだった。ガルボの「マタ・ハリ」なんかよりずっと。いや、おもしろくないこともなかった。

万里江　素直におもしろかったって言いなさいよ。スタンバーグ監督が「モロッコ」の次に撮ったディートリッヒの映画。私、好きよ、あの映画。

芳子　やっぱりそうか。

万里江　ディートリッヒの映画はみんな大好き。私、彼女にあこがれて、女優になりたいと思ったんだもん。舞台は大戦下のウィーン。「生きるのも死ぬのも恐くない」なんて言う美しい娼婦が、度胸と愛国心を見込まれて、諜報局の女スパイとして働くことになる。コードネームは「Ｘ２７号」。

芳子　僕の別名を知ってるか？

万里江　え？　愛新覚羅顕子、東洋のマタ・ハリ。

芳子　違う！

万里江　ごめんなさい。あとは？

芳子　女間諜Ｘ十四号。

万里江　へえ……、映画みたい。何、あんたの前に十三人の女スパイがいるの？

芳子　第十四王女だから、十四号ってだけだ。田山がつけた。

万里江　へえ。

芳子　どのシーンが気に入ってる？

万里江　ええ？　どこもみんな好きよ。ガルボの「マタ・ハリ」と違って、出てくる男がみんないい男よね。ま、若くはないけど。彼女のせいで自殺する直前にふざけた電話かけてきたり。あんたもそう思うでしょ？

芳子　まあ、そうだな。

万里江　でも、一番輝いてるのはディートリッヒよ。娼婦がスパイになったかと思うと、村娘に変装したり。一番最初のシーン、雨の中、ストッキングをたくしあげるディートリッヒのきれいな脚。もう最高。それにね、ディートリッヒが演じてる娼婦の名前は、マリーっていうのよ、もう他人とは思えない。

芳子　僕もだ。

万里江　なんだか不思議な縁があるわね。あの映画と私たち。

芳子　そうだな。

**間**

万里江　寝るの？　あの映画で一番好きなのは、やっぱりラストよ。やっぱり男のために処刑されることになったディートリッヒは尋ねられるの「なぜ、敵の重要人物を逃した？」「たぶん愛してたからね」「国のために働くことで不幸な人生をやり直せたのに、そうしなかったのはなぜだ？」「たぶん私にそれだけの値打ちがなかったんでしょう」かっこいいわね。それから、処刑場に連れて行かれる前に、若い兵士に言うの「鏡ある？」って、兵士はサーベルを抜いて彼女に前に差し出すわ。サーベルに顔を映して髪をととのえるディートリッヒ。とっても色っぽい。

芳子　ふん、つまらん小芝居だ。
万里江　でも、サーベルよ、男らしくない？　その兵士は、処刑場のマリーに目隠しの布を渡すの、でもね、彼女は目隠しをこばんで、彼の涙を拭いてやる。いいシーンだわ。彼は、女を殺すなんてできない！って叫んで銃を投げ出す、兵隊たちがざわざわしてる間に、ディートリッヒは口紅をひきなおして、ストッキングを直す。そして、パーン！　銃殺される。
芳子　バカな女だ。
万里江　でも、あんたも好きなんでしょ？　そういうところが、違う？
芳子　違う。
万里江　あ、そうか、次から次へといろんな人間になっていくところ？　あんたもそうだものね、男になったり、女になったり。
芳子　僕は男になったり、女になったりしてるわけじゃない。女でいながら、同時に男なんだ。
万里江　あんたってほんとによくばりね。
芳子　お前だってそうじゃないのか？
万里江　え、違うと思うよ。私、ただ女になれたらそれでよかったんだもん、あとは女優として成功できたら言うことなし。
芳子　よくばりか……。

間

芳子　娼婦になってみたんだ。
万里江　え？
芳子　早苗の川島芳子がすっかり板についてしまったのが、しゃくにさわる。むしゃくしゃするから、誰でもない夜の女になって、路地で男の袖を引いてみた。
万里江　ええ？　あんた、何してんのよ？　まさか……
芳子　若い日本の兵隊だった。僕の顔も知らない下っ端だ。だから、中国娘の振りをしてやった。何を言ってるのかわからないって風情で。このあたりの娼婦は、宿を取らないんだな。塀の蔭でことに及ぼうとするから、それはいやだと言ったら、殴りやがった。
万里江　！
芳子　知らないってのはすごいなあ。僕は川島芳子だって今度は日本語で言ったんだが、ばか言うな、川島芳子がこんなところにいるもんかって。
万里江　キャシー……
芳子　いつもは持ち歩いてるピストルがあったらと思った。急所を蹴り上げてようやく逃げ出してきたってわけだ。

**芳子、笑う。**

万里江　あんた、いいかげんにしなさいよ。何考えてんの？

芳子　自分じゃない人間になるってのが、どんな気持ちか知りたかったんだよ。

万里江　じゃあ、もっと他にしようがあるでしょう。

芳子　どんな？

万里江　それは……、あんた、義理の父親に貞操を奪われたってほんと？

芳子　さあな。

万里江　嘘なの？

芳子　どっちでもいいことだ。

万里江　よくない。あんたの実の父親は「おもちゃをおくる」って言って、養子に出したんでしょ？　あんたまでが、自分のこと、おもちゃにしてどうすんのよ？

芳子　何が悪いんだ？　みんなが僕のことをおもしろがって、僕をもてあそぼうとする。だったら、その前に、自分で自分をおもちゃにしてどこがわるいんだ。

万里江　いいわけないでしょ。

芳子　お前にそんなこと言われる覚えはない。

万里江　言うわよ。友達なんだから。

**間**

芳子　そう思ってるのはお前だけだ。

万里江　じゃあ、なんで、私が男だったってこと、ずっと内緒にしてくれてんの？

芳子　……。

万里江　私、あんたに弱み握られたと思った。もう一生あんたに頭が上がらないと思った。でも、あんた、別に私をおどすでもなく、それまでと変わらず、この部屋にいる。どうして？

芳子　……。

万里江　あんたわがまま放題で、つらいことなんか何もないって思ってたけど、あんたちっとも幸せじゃないのね？

芳子　余計なお世話だ。僕は上海事変の英雄だ。僕がいなかったら、日本軍はいまもまだ満州を建国できずにいただろう。僕は、上海の抗日運動の拠点だった、三友実業公司の中国人労働者たちに日本人の坊さんたちを襲うようたきつけた。今度は、上海在住日本人の支那義勇団に三友実業公使の中国人たちを襲うよう指示を出した。みんな、日中両方に顔が利く、川島芳子だからこそ、できたことだ。上海で起きた大事件、世界の目はこの街に釘付け、その間に、日本軍が満州を建国したんじゃないか。この僕がいなかったら。世界の歴史は変わってたんだ。

万里江　……。

**間**

芳子　こわかった。十六の年、十月六日の夜、九時四十五分。僕はあの夜のことが忘れられない。どんなに忘れようとしても。寝室を別にしてもだめだった。髪を切って男のようになっても、義父は部屋にやってきた。これこそが日本と支那の和合だと言って。

**万里江、芳子の肩を抱く。**

芳子　（万里江の手からのがれて）なーんてね。（芝居がかって）今の話は、秘密だよ。もう、このことには触れたくないんだ。もし、今の話はほんとうかと聞かれることがあったら、さあ……、あの人の言うことは嘘か本当かわかりませんからと言ってくれよな。

**間**

万里江　わかったわ。あんたは、ほんとに嘘が上手。女優にでもなればいいのに。

芳子　それは、マリーにまかせるよ。

**ドアが開いて、早苗がやってくる。**
**男装がすっかり板についている。**
**ほとんど芳子そのものと言ってもいい。**

早苗　いや、芳子さん、ひさしぶりだなあ。あんたが上海にいるあいだは、僕は、男としての僕を十分に楽しませてもらうとするよ。

万里江　早苗さん、あなた酔ってるの？

早苗　いやあ、上海の夜は気持ちがいいなあ。僕が歩くと、日本人も中国人もみんな脇へよけるんだ。そして、こそこそと話してる。川島芳子だ。女スパイの川島芳子だぞって。（芳子に）どうです。僕の男装？　おかげさまですっかり板につきました。男言葉も、この軍服も、そして川島芳子という新しい服も。あなたのおかげです。

芳子　それはよかった。

**芳子、立ち上がって、部屋へ消える。**

早苗　（万里江に）何かいけないこと言ったかな？　あの人が言いそうなことを言っただけなんだけど。

万里江　そうね。お見事だったわ。

早苗　（万里江の手を取り）ありがとう。

**早苗の笑顔。**

＊　＊　＊　＊　＊

## 八場

**数日後の午後。**
**芳子と村西。**
**村西が荷物をまとめている。**
**芳子はイスに座っている。**

芳子　何もそんなにいそぐことはないだろう。
村西　二ヶ月の約束も今日でおわり。僕は晴れて自由の身だ。
芳子　なんだ、その言いぐさは。
村西　きみも、もういいんだろ、早く屋敷に戻ったらどうだ？
芳子　何、いそぐこともない。
村西　そうか、早苗くんがいるから、そう簡単には帰れないのか？　なかなかうまくいかないねえ。
芳子　早苗も、今日、屋敷を引き払うことになってる。なんでも、一度、日本に帰るんだそうだ。
村西　そうか、じゃあ、同じ船になるかもしれないな。
芳子　あんたも帰るのか？
村西　ああ、頭の中に、きみが体験してきたこと、そして、早苗くんが見てきたいろいろ。こぼれないうちに、早く吐きだしたいんでね。
芳子　いい小説を頼むよ。
村西　あまり期待しないで待っていてくれ。
芳子　いや、期待してるよ。
村西　今だから言うが、僕はこの仕事を引き受けたことを後悔してるんだ。材料はいっぱいもらった。でも、どうにも人物に魅力が感じられないんだ。
芳子　そこをなんとかするのが、小説家の腕だろう。
村西　まあ、一番の問題は、僕が君をちっとも魅力的だと思ってないってことなんだろうがね。
芳子　……。

村西　二ヶ月、ここで暮らして思ったよ。君は男として振る舞いたい女だ。だが、男にはなりきれてない。自分でそのことに気がついてるか？　男になろうとすればするほど、女の部分があらわになる。女スパイ映画の中のヒロインと同じだ。だったら、少しはマリーから「女」ってものを学んだらどうだ。

芳子　ずいぶんはっきりものをいうんだな。

村西　ああ、僕は、これから君のことを書く。もし、僕に何かしたら、小説の中の君がどうなるかわからない。立場は逆転だ。どうだ、ざまあみろ！　じゃあ！

**村西、荷物を持って、出て行こうとする。**

芳子　待て。ちょっと提案があるんだが。

村西　何だい？

芳子　おもしろい小説にするには、魅力的な脇役が必要じゃないかと思うんだ。どうだろう、マリーを登場させてみては？

村西　マリーを？　なぜ？

芳子　魅力的だからさ。あんたは知らないかもしれないが、あいつは日本で俳優をやってたんだ。女形の俳優をね。

村西　……。

芳子　あいつは男だ。川野万里江という名で、映画に出ていた。それが、映画界から女形の俳優がいらなくなったんで、ほんとうの女になって、女優として再デビューしたいんだそうだ。宦官の手術を受けてね。

村西　……。

芳子　去勢だよ、去勢。宦官ってのは、中国に古くから伝わる悪しき伝統だ。纏足なんかと同じね。今のご時世にそんなバカなことを考えるやつがいるとは思わなかった。そうなんだよ、あいつは本当は男なんだ。

**間**

村西　でも、女だな。僕にとっては。

芳子　なんだって？

村西　知ってたよ。そのことなら。ああ、僕はずいぶん女癖が悪いんでね。人は手当たり次第とも言ってる。だから、マリーにも手を出そうとした。そうしたら、ちょっと待ってと言われた。自分はこういう人間だけど、それでいいかと？

芳子　……？

村西　びっくりしたなあ。マリーはどうやら、付き合おうとする男には、その話をちゃんとしなきゃいけないと思ってるらしいんだ。どうも、それで、長続きしないらしいんだな。

芳子　まさか……

村西　ほんとだって。僕たちがここにやってくる前、しばらく一緒に住んでたのは、桃山のバンドマンだが、そいつからも聞いたんだから間違いない。

芳子　それで、つきあったのか？

村西　まあ、当たり前の男と女ってわけにはいかないがね。今じゃ、いい友達じゃないかと思ってる。もし、マリーがいなかったら、君との二ヶ月は耐えられなかったろう。

芳子　なんでそんなに平気でいられるんだ。

村西　ここが上海だからだよ。そういう街じゃないか。マリーのこと、街中の店中の噂になってもよさそうなのに、みんなちっともさわがない。もしかすると、そんなにびっくりしてるのは、芳子くんだけだ。じゃあ。

**村西、出て行こうとすると、ドアのところで、田山に出くわす。田山のうしろには山本と早苗。**

田山　どうしたんだ？

村西　芳子くんとのおしゃべりもこれでおしまいです。さあ、お返ししますよ。それじゃ、また。

**村西、出て行く。**

田山　（芳子に）ご苦労だったな。じゃあ、屋敷に戻るか？　千鶴子さんがすっかり部屋をきれいにしてくれたぞ。じゃ、山本。荷物をまとめろ。

山本　はい。

**山本、芳子の部屋へ向かう。**

芳子　勝手なことをするな！

**山本、立ち止まる。**

芳子　僕のものは千鶴子にしかさわらせない。

田山　荷物は昨日のうちにまとめたと千鶴子さんが……。

芳子　だまれ！

早苗　じゃあ、僕が……

芳子　うるさい！　何だその目は？（田山に近づき）お前は、僕を自分の好きなようにできると思ってるんだろうが、そうはいくもんか。卑屈にはいつくばるお前の目の底には、僕に対する憐れみと蔑みがある。そのことに気がつかないとでも思ってるの

か？

田山　そんなものはない。ただ、おれは……

芳子　だまれ！　お前の顔なんか二度と見たくない。僕も、日本に帰るとしよう。

田山　おい、待て。今夜、植松少将と会う約束はどうする。

芳子　知るか。

田山　おい、芳子！

芳子　勝手にしろ！

**芳子、出て行く。**

早苗　あ、芳子さん。

田山　いいからほうっておけ。

山本　よろしいのですか？

田山　ああ。

早苗　私が来たのが気に障ったのでしょうか？　お世話になりましたとご挨拶にうかがったんですが。

田山　何、気にすることはない、あれはああいう女だ。あの性分だけは、まねしないでいてほしいがね。

早苗　はい。芳子さんのおかげで、ずいぶんいろんなことに気がつきました。あの人が、どんな気持ちで毎日をすごしているのか？

田山　気持ち？

早苗　ええ、朝起きて、男の格好をするのは、とても不思議な気持ちです。あの人は毎朝、別な自分に生まれ変わってるんですね。そして、大変な努力で、毎日を過ごしてる。

田山　何、大変なものか、あいつは好きでやってるんだ。

早苗　そうでしょうか？　私、できれば、今日、川島芳子という服を、お返しできたらと思っていました。私にはとてもじゃないけど、大きすぎる。

田山　何を言うんだ、まだまだ、始まったばかりじゃないか。あんたには、もっともっと働いてもらわないといけないんだ。

早苗　おかげさまで、痔もすっかりよくなりました。これからは、もとの梅原早苗として生きて行けたらと思います。軍服はこれからも着続けると思いますけれど。

田山　そうか、わかった。じゃあ、そうしてくれ。

早苗　あの、マリーさんにもごあいさつを。

田山　いないようだ、なに、ちゃんと伝えておくよ。

早苗　では、失礼いたします。

**早苗、出て行く。**

田山　これでおしまいだな。
山本　そうですね。永い二ヶ月でした。
田山　そうじゃない。川島芳子だよ。
山本　は？
田山　植松少将はおれに、命が惜しければ、川島芳子を亡き者にしろとの命令だ。
山本　ええ？
田山　これから、三人で会って、なんとかしようと思ってたんだが……。
山本　少佐、それでは……。
田山　もう、おしまいだ。あいつはいつもそうだ。俺があいつのことを心底思って、よかれと思ってやったことを、みんな台無しにする。（怒鳴る）もう、たくさんだ。
山本　少佐。
田山　山本、頼んだぞ。あいつが、この上海にいるうちに、かたづけてくれ。
山本　私がですか？
田山　ああ、そうだ。
山本　しかし、芳子さんは、これから、日本軍が世に出す英雄になるのではないのですか。そのために、小説も？
田山　英雄は死んではじめて、英雄と呼ばれるんだ。生きているうちは、いつまでたってもただの人間なんだからな。
山本　しかし……
田山　お前にだから、頼むんだ。植松少将は、海軍の手で暗殺してもいいんだが、それではお前の気がすまないだろう。あの女の最後は、お前の手でと。
山本　でしたら、ご自分でなさったらよろしいのでは。
田山　いいから、やれ。
山本　……。
田山　そうして、あいつがどんなふうに死んだかを、俺に知らせてくれ。
山本　……わかりました。

**万里江が入ってくる。**

万里江　まあ、田山少佐。今、キャシーと道で会ったんですけど、どうかなさいました。
田山　（ほほえんで）何、またあいつを怒らせてしまったようなんだ。
万里江　キャシーはほんとにわがままね。
田山　なにしろ、清朝の王女だからな。ほんものの。世話になったな。あいつの荷物は、千鶴子さんが引き取りにくるだろう。
万里江　わかりました。

田山　では……

田山、出て行く。
山本、一人残っている。

万里江　山本さん。
山本　失礼いたします。

山本、出て行く。

＊　＊　＊　＊　＊

## 九場

翌日の午後。
健太郎と万里江。

万里江　じゃあ、もう一度！
健太郎　（中国語）払いなさい。（付銭！　フチェン！）
万里江　もっと強く。
健太郎　（中国語）払いなさい。（付銭！　フチェン！）
万里江　なんだか迫力ないわね。そんなんじゃ、あの大家、払ってくれないわよ。
健太郎　だったら、マリーさんが……
万里江　だめだめ、ほんとうに払ってほしいと思ってるあなたが、言うのが一番じゃない？
健太郎　マリーさん、払ってほしいと思ってないんですか？
万里江　思ってるわよ、だから、あんたに中国語。
健太郎　ほんとですか？
万里江　大事なのは、気持ちよ、気持ち。こころをこめて、もう一度！
健太郎　（中国語）林おばあちゃん、払いなさい。（林婆婆、付銭！　付銭！　リンポーポー、フチェン！　フチェン！）
万里江　あ、今の伝わった。払いたいって気持ちになった。
健太郎　ほんとにこれだけでいいんですか？
万里江　だいじょうぶ。その一言に思いを込めて！　きっと伝わるから。

健太郎、座ってしまう。

万里江　ちょっと休憩ね。
健太郎　品ちゃん、まだ越してこないんですか？
万里江　キャシーたち、昨日出てったばかりだから。品ちゃんもあれで、つまんないものいっぱい持ってるのよ。荷物まとまらないんだって。
健太郎　たしかにどうでもいいものばっかり買い物してますね。
万里江　ねえ、あんたたち、一緒に住んだりしないの？
健太郎　僕も会社の寮なんで。
万里江　まさか、あんたまで転がりこんでこないわよね？
健太郎　だいじょぶです。でも、タンゴは習いに来ますけど。
万里江　どうして？　もうキャシーもいないのに？
健太郎　それとこれとは別ですから。
万里江　ま、いいわ。品ちゃんが越してきたら、二人で仲良くやんなさい。私、邪魔しないから。
健太郎　マリーさん……
万里江　品ちゃん、焼き餅焼きなんだもん。あの子がいるのに、あなたと一緒にタンゴなんて踊ってられないわ。そうだ、品ちゃんと踊ればいい。
健太郎　僕はマリーさんに……

**ドアをノックする音。**

万里江　どうぞ。

**ドアが開いて、林がやってくる。**

林　（中国語で万里江に）家賃をもらいに来たよ。（ウォ[3]ライ[2]ショー[1]ファン[2]ジュ[1]。）
万里江　（中国語で）ああ、ちょっと待ってて。（アア[4]！デン[3]イ０シャ[4]！）（健太郎に）ほら！
健太郎　ええ？
万里江　いいところに来たじゃない。やってごらんなさい！
健太郎　そんな……

**健太郎、万里江に無理矢理、林の前に連れて行かれる。**

健太郎　あの……（中国語）林おばあちゃん、払いなさい。（林婆婆、付銭！　リンポーポー、フチェン！）

林　……？
万里江　やだ、またとぼけてる。もっとがんばる！
健太郎　（中国語）林おばあちゃん、払いなさい。（林婆婆、付錢！　リンポーポー、フチェン！）
林　……。

**健太郎、林の手をとる。**

健太郎　（中国語）払いなさい。払ってください！（付錢！　付錢！　フチェン！　フチェン！）

**林、健太郎の手をほどく。**

林　（日本語で）ひどい中国語だ。誰にならった？
健太郎　誰って、マリーさんに。（気がついて）ええ？
万里江　あんた、日本語？
林　おかしいか？　あなたくらいは、話せるんだ。
万里江　ちょっと待って、じゃあ、なんで黙ってたのよ？
林　関係ないね。私は中国人だ。自分の言葉で話す。当たり前だ。
健太郎　なんだ、じゃあ、日本語でいいですね。蓄音機の修理代払ってください。一二〇元です。
林　いやだね。
健太郎　（また手をにぎって）払ってください！

**間**

林　あんたも払え。
健太郎　払うって何を？
万里江　家賃なら、ちゃんと払ってるじゃない。今月分だって、もう。
林　ちがう。私がなくしたものの分。
万里江　あんたがなくしたもの？
健太郎　何をなくしたんですか？
林　息子だよ。私の息子。
健太郎　……。
林　あの子は、日本人と闘って死んだ。日本人と一緒に。
万里江　いつ？

林　今年の二月。去年、家を出て、軍隊に入った。爆弾に火をつけて、とびこんだ日本人と一緒に死んだ。

健太郎　爆弾三勇士？

林　二月二十二日。あの子が死んだ。何も残らない。残ったのは、これだけ。この上、私は何を払えばいいんだ。

**林、蓄音機に近づき、ハンドルを回す。蓄音機は回らない。**

林　直ってない！。だますか？

健太郎　直しますよ。ちゃんと。だから……

林　払え！！

**間**

健太郎　わかりました。

万里江　いいの、健ちゃん。

健太郎　（林の手をとって）ちゃんと直しますから。僕が必ず。……だから、その時には……、いいです。僕が払いますから。

林　それでいい。

万里江　あんた、いつから日本語知ってるの？

林　くやしいからね、勉強したんだ。日本人が何を話してるのか、知りたかった。だから、みんな知ってる。あんたたちが、何話したか。

万里江　そうだったの？

林　（健太郎に）あんたのとしは？

健太郎　２５になります。

林　あの女に気をつけろ。悪い女だ。

健太郎　はい。

万里江　健ちゃん！

**林、出ていこうとする。**

万里江　ちょっと待ちなさいよ。

林　（立ち止まって）なんだ？

万里江　私、あんたに日本語教えてあげるわよ。

林　家賃のかわりか？　いやだね。

万里江　違う。聞いてられないわ。へたくそで。だから……。

林　ただか？
万里江　あんた一人なんでしょ？　お茶でも飲みに来なさいよ。ここはにぎやかだから。
林　にぎやか？　にぎやか？　にぎやか？

**林、つぶやきながら、出て行く。**

万里江　ようやく、キャシーがいなくなったと思ったのに。また忙しくなるわね。
健太郎　マリーさん。

**品子がやってくる。**

品子　マリーさん、あ、健ちゃんも。
万里江　どうしたの品ちゃん、もう越してくるの？
品子　そうじゃなくて、キャシーが、川島芳子が殺されたの！
万里江・健太郎　ええ？
品子　南京路の太閤飯店の近くで中国人の暴動が起きたの。私、買い物してたんだけど、ガラスの割れる音がして、それから銃声がして、私、こわいから反対の方向に走っていったんだけど、そうしたら、日本人が走ってきたの。暴動だ、暴動だって、言いながら。で、話してるのが聞こえてきたんだけど、そしたら、川島芳子が死んだって。撃たれたって。中国人に殺されたって。
万里江　まさか……？
品子　ほんとうよ。軍服を着た女だって。私、もうこわくって。いそいで走ってきたの。
万里江　そう、キャシーが。ちょっと、見に行きましょう。
健太郎　あぶない。まだ中国人が暴れてるんだったら、近づかない方が。
万里江　何言ってるの？　まだ、なんとかなるかもしれないでしょ？
品子　マリーさん。
万里江　行くわよ。さあ……

**ドアに向かうと、芳子が現れる。軍服を着ている。後から千鶴子も。**

芳子　マリー、僕なら無事だよ。
万里江　……キャシー、よかった。
健太郎　じゃあ、撃たれたのは？
芳子　早苗だよ。
万里江　……。
芳子　田山と一緒に食事をしようと車を降りたら、早苗に声をかけられた。仕事が終わら

ず、日本に帰るのが一日遅れたんだそうだ。立ち話をしていたら、太閤飯店のガラスが割れた。銃弾だ。あたりは騒然となった。逃げまどう人、叫び声。とりあえずその場を去ろうと早苗を一緒に車に乗り込もうとしたんだが、大勢の人で車がなかなか動かない。どうしたものかと一度、車を降りたところで早苗が撃たれたんだ。即死だったな。

**間**

芳子　気の毒に。さっさと日本に帰ればよかったものを。ぐずぐずしてるから。

万里江　あなた平気なの？　死んだのは早苗さんよ。

芳子　平気なわけないだろ。狙われたのは僕だ。早苗は、僕に間違われて死んだんだ。ミイラ取りがミイラになるとはこのことだな。

万里江　キャシー。

芳子　もうキャシーは、おしまいだよ。僕は川島芳子だ。僕はこれから、男として生きるんだ。男装の麗人、川島芳子としてね。

万里江　男装の麗人？

芳子　ああ、昨日、日本に帰る、村西に言付けてやった。小説の題名は「男装の麗人」とするようにと。どうだい、いい題名だろう？

万里江　そうね、とっても素敵。

**田山と山本がやってくる。**

田山　こんなところでぐずぐずしている場合じゃない。

芳子　マリーに一言挨拶がしたかったんでね。

田山　早苗くんには気の毒なことをしたな。

芳子　僕もまだまだだな。早く有名にならないといけない。また人違いで誰かに死なれたりするのはやりきれない。

田山　何、さっきのはただの暴動だ。気にすることはない。

芳子　僕ならいつ殺されたって文句はないのに。

田山　さすが川島芳子だ。じゃあ、いくぞ。

**田山、退場。**

芳子　（山本に）これからは、自分でねらうんだな。人任せはよくないんじゃないか？

山本　……何のことですか？

芳子　田山少佐にもそう言っておいてくれ。

山本　……わかりました。

山本、退場する。

芳子　じゃあな、マリー。もう会うこともないだろうが。

万里江　そうね。さようなら。川島芳子さん。

芳子　女優としての成功、祈ってるよ。

万里江　あんたも幸せになってね。

芳子　ああ。もちろんだ。じゃ。

芳子出て行く。

千鶴子　（頭を下げる）お世話になりました。

＊　＊　＊　＊　＊

## エピローグ

一九三二年（昭和七年）九月。
ところは同じ、マリーの部屋。
午後。
品子と万里江、健太郎が一冊の雑誌を囲んでいる。
それは「婦人公論」昭和七年九月号。
村西敏雄の「男装の麗人」の連載が始まった号だ。

品子　そうなの、私の名前が載ってるの。

健太郎　ええ？

健太郎、雑誌を取り上げる。

品子　大槻品子って、私。でも、なんだか、この人、名前は私だけど、マリーさんみたいなの。ダンスが上手な、先輩ダンサー。

万里江　へえ、そうなの？

品子　私、手紙にマリーさんのこと、よく書いてたから、実家でもびっくりして。これ送ってきたの。

万里江　親切な親御さんね。

品子　どうせすぐ帰るのに。
万里江　待ちきれないのよ、きっと。
健太郎　婦人公論、昭和七年九月号か。これから、半年間連載するんですね。
品子　そうみたい。
健太郎　僕も出てくるかな？
品子　出てくるんじゃない？　私もマリーさんも出てきてるんだから。
万里江　私、出てきてないでしょ？
品子　でも、主人公の名前は、満里子よ。きっと、村西さん、マリーさんのつもりで書いたんじゃないかな？
万里江　そうかしら？
健太郎　あ、「男装の麗人」謎の主人公は誰だ？って、懸賞やってますよ。見事当てた方には、豪華ハンドバッグを贈呈って。
品子　私もう送っちゃった、モデルは「川島芳子」だって。そんなの簡単じゃないね。
健太郎　読者をバカにしてるなあ。
万里江　それも、宣伝なんでしょ？　この小説を読んだ人がみんな「川島芳子」って書くのよ。ただ聞いてるだけじゃなくて、書くんだもの。身近に感じられるようになるって、そういう計画よ、きっと。
健太郎　田山少佐かな？
万里江　きっとキャシーね。
品子　やりそう。この本、もう売り切れなんだって。川島芳子はすごい人気だって、お母さん、手紙に書いてた。
健太郎　（本を見ていたが）あ！
万里江　どうしたの？
健太郎　痔だ？
万里江　え？
健太郎　最初の場面は、満里子が舟で上海に到着する場面なんだけど、舟の上で、満里子は痔で苦しんでる。
万里江　ほんと？
品子　ほんと。村西さん、ひどいね。
健太郎　どうして、痔の話から始めるかな？　こんなのありですか？
万里江　早苗さんのこと、書きたかったのかもしれない。
品子　そうか。
健太郎　そうですね。
万里江　ありがとう、品ちゃん。

**と言いながら、本を品子に渡す。**

品子　いいよ、マリーさんにあげる。せめてもの置きみやげ。
万里江　じゃあ、ありがとう。（婦人公論を品子に渡し）お見合い、うまくいくといいわね。
品子　うん。
万里江　ごめんね、ジュリア。
品子　ええ？
万里江　あなた、ジュリアって名前ついてるのに、いつも品ちゃんって呼んでごめんなさい。
品子　いいのいいの、定着しなかっただけだから、ちょっと淋しかったけど。でも、日本に帰ったら、私は、もう品子だから。いいの。
健太郎　それじゃ、ジュリア。
品子　バイバイ、健ちゃん！　じゃあね、マリーさん。

**品子、出て行こうとする。**

万里江　送るわよ。
品子　いいわよ、ここで。泣けてくるから。
万里江　じゃあね。
品子　うん。

**品子、出て行った。**

万里江　いいの、行かせちゃって？　いろいろあったんだろうけど。
健太郎　いいんです。僕も、これからどうなるかわからないんで。どうやら奉天に行くことになりそうなんです。
万里江　まあ、どうして？
健太郎　関東軍の手伝いです。田山少佐がこの間店にやってきたんですよ。山本さんと一緒に。僕が店の奥で無線機を使って奉天と交信をしてたら、どこまで交信できるのか？って聞いてきたんです。大連や東京とも交信できますよと言ったら、急にまじめな顔になって、また連絡をするからって。翌日、公使館に出頭せよという命令書が届いたんで行ってみたら、僕の無線技術を国のために役立ててくれないかって言うんです。どうしようかって考えてたら、いつの間にかピストルが僕に向けられていて……。
万里江　ええ？
健太郎　なので、奉天に行きます。
万里江　だいじょうぶなの？
健太郎　ええ、山本さんもいるんで、たぶん。
万里江　そう。キャシーはどうしてるのかしら？

健太郎　僕も聞いてみたんですけど、あの後、一度日本に帰って、また大連で田山少佐と合流したようですよ。今は、奉天にいるらしいです。
万里江　そう。
健太郎　あの二人、どうなってるんでしょうね？
万里江　さあ、くされ縁ってやつじゃない。
健太郎　なんで別れないんだろう？
万里江　でも、そういう相手がいるってことは、しあわせなのかもしれないわね。
健太郎　そうでしょうか？
万里江　一人よりはずっといいんじゃないかしら？
健太郎　マリーさん、また一人になっちゃいますね。
万里江　平気よ。あなたももう行ったら？

間

健太郎　そうだ、この間、僕映画見たんです。
万里江　何を？
健太郎　「マタ・ハリ」が見たかったんですけど、もうどこでもやってなくて。
万里江　キャシーが手を回したって話よ。
健太郎　見たのは「間諜Ｘ２７」。
万里江　どうだった？
健太郎　おもしろかったです。女スパイってこういうものなのかって。でも、川島芳子とは全然違うなあって。
万里江　そうね。でも、キャシーは大好きなのよ、あの映画。
健太郎　そうなんですか？
万里江　うん。そうなの、だから、女スパイものなのに、こっちでもまだ見ることができるんじゃない？
健太郎　ああ、そうか。

林がやってくる。

林　マリー、あんたに客だよ。
万里江　誰？
林　北京から来たって言ってる。乞食みたいなじいさんだ。
万里江　乞食？　また新しい言葉ね。でも、そんな知り合いいないわ。
林　だいじな用があると言ってるよ。
万里江　わかった。下で待たせておいて。

**林、退場。**

健太郎　それじゃ、僕も……。

万里江　そう。元気でね。

健太郎　はい。

万里江　そうだ、ちょっと踊っていかない？　まだ、時間あるでしょ？　そうね、何にしようかな。ちょっと待ってて。

**万里江、レコードを選び始める。**
**健太郎、正面を向いて語り始める。**

健太郎　この翌年、昭和八年。川島芳子は大ブームを引き起こしました。「男装の麗人」は、映画化に舞台化。世間から忘れられていた川島芳子は蘇ったのです。その後の川島芳子は、実は大したことはしていません。うさんくさい山師と知り合ったり、田山少佐とくっついたり別れたり、上海にも来ていたようですが、かつて二ヶ月を過ごしたこの部屋に再びやってくることはありませんでした。

僕は、その後、新京郊外にあった軍事学校に入学させられました。すべての情報が満州全土から各地に届く通信網を整備せよとの命令で、チャムス、ハイラルなど満州の辺境を転々としたんです。そして、また内地に戻り、終戦を迎えました。

昭和二十三年三月二十五日、「男装の麗人、処刑さる」という記事が新聞の一面を飾りました。川島芳子が、中国国民を裏切った漢奸として処刑されたのです。田山少佐の指示で村西さんが書いた小説「男装の麗人」が裏切りの証拠になったそうです。ひどい話、皮肉な話です。

そのとき、僕が思い出したのは、昭和七年のあの二ヶ月のことでした。

あの人は、銃殺される前に、何を思っただろう。あのとき、みんなで見に行った「マタ・ハリ」のことを思い出しただろうか。そして、「間諜Ｘ２７」のことを。死ぬ前に、化粧を直したいと思ったんだろうか、いや、そんなことを思う余裕もなかったんだろうか。それでも、あの人は、取り調べの最後まで、身近にいた人間を密告することはなかったそうです。おかげで生き延びた人間が、日本には何人もいます。享年四十一歳。銃殺されたあの人の上着のポケットから、辞世の句のようなメモが出てきたそうです。そこにはこう書いてありました。「家あれども帰り得ず。涙あれども語り得ず。」

**万里江、一枚のレコードを手にする。**

万里江　ねえ、健ちゃん、やっぱりこれにしましょう。あなたとのラストダンスは。私たちが最初に踊った、この曲。

万里江、レコードに針を降ろすと、タンゴ「ジェラシー」が流れ始める。
健太郎と万里江、お互いの目を見ながら、近づいていく。
二人が手を取り合ったところで、世界は闇に沈んでいき、暗闇の中、「ジェラシー」が鳴りつづけている。

幕

以下の資料を参考にさせていただきました。（順不同）


・「リバイバル〈外地〉文学選集３『男装の麗人』」村松梢風　大空社
・「男装の麗人」村松友視　恒文社
・「男装の麗人 川島芳子伝」上坂冬子　文春文庫
・「清朝第十四王女 川島芳子の生涯」林えり子　ウェッジ文庫
・「評伝 川島芳子　男装のエトランゼ」寺尾紗穂　文春新書
・「上海コレクション」平野純 編　ちくま文庫
・「阿片王 満州の夜と霧」佐野眞一　新潮文庫